

プロレタリア革命と フルシチョフ修正主義

ソ連共産党中央委員会の公開書簡を評す（八）

外文出版社

北京

プロレタリア革命と
フルシチョフ修正主義

ソ連共産党中央委員会の公開書簡を評す（八）

『人民日報』編集部

『紅旗』誌編集部

（1964年3月31日）

外文出版社

北京

プロレタリア革命とフルシチョフ修正主義

ソ連共産党中央委員会の公開書簡を評す（八）

『人民日報』編集部

『紅旗』誌編集部

（一九六四年三月三十一日）

この論文では、よく知られているひじょうに有名な問題、つまり、いわゆる「平和的移行」の問題について論じてみたい。この問題が有名になり、人びとの注意をひくようになったのは、フルシチョフがソ連共産党第二十回大会でこれを持ち出し、ソ連共産党第二十二回大会でこれを綱領の形で体系化し、その修正主義の観点によってマルクス・レーニン主義の観点に反対してきたためである。一九六三年七月十四日づけのソ連共産党中央委員会の公開書簡でも、またもやこの使いふるされた論調がくりかえされている。

国際共産主義運動史上のあらゆる修正主義者によるマルクス主義への裏切り、プロレタリアートへの裏切りはすべて、暴力革命に反対し、プロレタリアート独裁に反対し、資本主義から社会

4 主義への平和的移行を主張する点に集中的にあらわれている。フルシチョフの修正主義もまったく同様である。この問題では、フルシチョフはベルンシュタインとカウツキーの弟子であり、またブラウダーとチトーの弟子でもある。

第二次世界大戦らしい、ブラウダー修正主義があらわれ、チトー修正主義があらわれ、「構造改革」論があらわれた。これらの修正主義はいずれも、まだ国際共産主義の隊列のなかでの局部的な問題であった。だが、フルシチョフ修正主義があらわれ、しかもソ連共産党指導部で支配的な地位をしめるようになると、それは国際共産主義の隊列のなかでの全局的な性質をもつ大問題となり、国際プロレタリア革命事業全体の成敗にかかわる大問題となった。

そのため、われわれはこの論文を書いて、これまでよりもさらにはつきりとした言葉で修正主義者に回答しようとおもう。

ベルンシュタインとカウツキーの弟子

ソ連共産党第二十回大会らしい、フルシチョフは十月革命の道と根本的に対立するいわゆる「平和的移行」の道、つまり、「議会の道による社会主義への移行」①というものをもち出した。

フルシチョフらの売りあるくいわゆる「議会の道」が、いったいどのようなものであるかを見てみよう。

フルシチョフは、ブルジョア独裁の条件のもとでも、ブルジョアの選挙法にもとづいて、プロレタリアートが議会で安定した多数を獲得することができると考えている。かれはいう。資本主義国の「労働者階級は勤労農民、知識人、すべての愛国勢力を自分のまわりに結集して、資本家、地主と妥協する政策を放棄しよう」としない日和見主義分子にだんこたる反撃をくわえさえすれば、反動的、反人民的な勢力をうちやぶり、議会で安定した多数を獲得することができる」②と。

フルシチョフは、プロレタリアートが議会で多数を獲得しさえすれば、権力を獲得したも同然であり、ブルジョアジーの国家機構を粉碎したも同然であると考えている。かれはいう。労働者階級が「議会で多数を獲得し、国内に強大な革命運動の存在する条件のもとで、議会を人民の権力機関にかえるなら、それはブルジョアジの軍事・官僚機構を粉碎し、議会制の新たな人民国家体制、つまりプロレタリアートの人民国家体制をうちたてたことを意味する」③と。

フルシチョフは、プロレタリアートが議会で安定した多数を獲得しさえすれば、社会主義的改造を実現することができると考えている。かれはいう。議会で安定した多数を獲得すれば、

「いくつかの資本主義国といぜん植民地だった国の労働者階級のために根本的な社会変革実現のための条件をつくり出すことができる」④。また、「いちぶの資本主義国では、労働者階級はいまの条件のもとでも、圧倒的多数の人民を自分の指導のもとに結集して、基本的な生産手段を人民の手にうつす現実の可能性が生まれている」⑤と。

ソ連共産党の綱領は、「多くの国ぐにの労働者階級は資本主義をくつがえすまえに、一般的改良の範囲をこえた若干の措置をブルジョアジーにとらせることができる」⑥とみとめている。この綱領はつぎのようなことまでみとめている。つまり、いちぶの国では、ブルジョアジー独裁の状況のもとでも、「ブルジョアジーにとつて、その基本的な生産手段の買いもどしに応ずることが有利となる」⑦のようなそういう情勢のあらわれる可能性がある、と。

フルシチョフのふれまわるこのしろものは、けつしてかれの発案したものではなく、第二インターナショナルの修正主義のやきなおしにすぎず、ベルンシュタイン主義とカウツキー主義の復活にすぎない。

ベルンシュタインがマルクス主義を裏切ったおもな目じるしは、合法的な議会の道を宣伝し、暴力革命に反対し、ふるい国家機構の粉碎に反対し、プロレタリアート独裁に反対したことである。

かれは、資本主義は平和裏に「社会主義へ成長する」ことができると考えている。かれはいう。現代ブルジョア社会の政治制度は「破壊すべきでなく、そのいちだんの発展をうながすべきである」⑧。「百年まえには流血革命なしに実現できなかった変革も、こんにちでは、われわれが投票、デモ行進、その他この種の圧力をかけさえすれば、実現することができる」⑨と。

かれは、合法的な議会の道が社会主義を実現する唯一の道だと考えている。かれはいう。労働者階級は「普遍、平等の選挙権をもちさえすれば、解放の基本的条件としての社会原則を手にいれたことになる」⑩と。

かれは、こう考えている。「労働者階級が数のうえでひじょうに強大となり、社会せんたいでひじょうに大きな役割をはたし、そのため、支配者の宮殿も労働者階級の圧力をもはやささえきれなくなり、ほとんど自然に崩壊してしまふ、といえるような、そういう日がかならずやって来る」⑪と。

レーニンがかつてつぎのようにのべた。「ベルンシュタイン主義者はマルクス主義をうけいれるにあたって、いまま昔も、マルクス主義の直接革命の面を除外している。かれらは、議会闘争を一定の歴史的時期にのみ適用できる闘争手段のひとつとは見ないで、主要な、ほとんど唯一の闘争形態と見、それは「暴力」、「奪取」、「独裁」を不必要にするものだとしている」(「ガ

デットの勝利と労働者党の任務』『レーニン全集』第一〇巻)と。

ベルンシュタインの後継者として、その名に恥じないのはカウツキー先生である。カウツキーはベルンシュタインとおなじく、極力、議会の道を宣伝し、暴力革命に反対し、プロレタリアート独裁に反対した。かれはいう。ブルジョア民主主義制度のもとでは、「階級の衝突を解決する武装闘争はもはや存在する余地がない」^⑫、あいもかわらず、「暴力で政府をくつがえす」ようなことを主張するなら、「それはいささか滑稽である」^⑬と。かれはレーニンとボリシェビキ党のことを、「根気がたりにないために暴力の手段をもちいる助産婦のようなもので、妊婦に九カ月目ではなく、五カ月目に分娩させてしまふ」^⑭と攻撃している。

カウツキーは正真正銘の議会議主義的クレチン病にとりつかれた者である。かれにはつぎのような名言がある。「われわれの政治闘争の目的はこれまでと同様、やはり議会での多数を獲得するという方法で国家権力をうばいとり、議会を政府のうえに立つ主宰者に変えることである」^⑮と。

カウツキーはまたのべている。「わたしの見るところでは、議会議共和国は(イギリスのような君主制の上層の人物がいてもいなくても)、そのなかからプロレタリアート独裁と社会主義社会が成長していく基礎である。このような共和国こそ、われわれがかちとるべき『未来の国家』

である」^⑯と。

レーニンはカウツキーのこうした曲論をきびしく批判した。

レーニンはカウツキーを非難して、つぎのようにのべている。「プロレタリアートは、ブルジョアジーの圧制のもとで、賃金奴隷制の圧制のもとでおこなわれる投票で、まずもって多数を獲得してから、はじめて権力をうばいとるようになるしなければならない、などと考えることは、ならず者か、ばか者でなければやれないことである。これは、愚鈍でなければ偽善の骨頂である。これは、階級闘争と革命を、旧制度のもとでの、旧権力のもとでの投票に代えることである」

(『イタリア、フランス、ドイツの共産主義者へのあいさつ』『レーニン全集』第三〇巻)と。

レーニンは、カウツキーの議会の道は「もう純然たる卑俗きわまる日和見主義であり、口先では革命をみとめながら、実際にはそれを否認している」(『国家と革命』『レーニン全集』第二五巻)とすどく指摘した。レーニンはのべている。カウツキーはプロレタリアート独裁を解釈するにあたって、「被抑階級が抑圧階級にたいしてもちいる革命の暴力をすつかり解消してしまつた。かれはマルクス主義を自由主義的に曲解する面で、世界記録をやぶつた」(『プロレタリア革命と背教者カウツキー』『レーニン全集』第二八巻)と。

われわれがこの論文のなかで、フルシチョフやベルンシュタイン、カウツキーの言論、およ

びベルンシュタイン、カウツキーを批判したレーニンの言論をこのように詳しく引用したのは、フルシチョフ修正主義こそ現代における掛け値なしのベルンシュタイン主義であり、カウツキー主義であることを証明するためである。ベルンシュタインやカウツキーとおなじく、フルシチョフのマルクス主義にたいする裏切りもまた、革命の暴力に反対し、「革命の暴力を解消する」一点にきわだつてあらわれている。しかも、こんにち、この面では、ベルンシュタインやカウツキーもあきらかに世界記録を保持する資格がない。すでにフルシチョフが新しい世界記録をうちたてたからである。フルシチョフはベルンシュタインやカウツキーの弟子たるに恥じないばかりではなく、出藍のほまれをえているのである。

暴力革命はプロレタリア革命の普遍的法則

暴力革命がプロレタリア革命の普遍的法則であることを認めるかどうか、ふるい国家機構をうちくだけかねばならないことを認めるかどうか、プロレタリアート独裁をブルジョアジー独裁におきかえねばならないことを認めるかどうか、これはゆらいマルクス主義とあらゆる日和見主義、修正主義との分水嶺であり、プロレタリアートの革命家とプロレタリアートの裏切り者との分水嶺である。労働運動の全歴史はこのことをわれわれに物語っている。

マルクス・レーニン主義の基本原理によれば、すべての革命の根本問題は国家権力の問題である。プロレタリア革命の根本問題は、暴力によつて権力を奪取し、暴力によつてブルジョアジーの国家機構をうちくだけ、自己の階級的独裁をうちたて、プロレタリア国家をブルジョア国家にうつてかわらせることにほかならない。

マルクス主義はこれまで一貫して、暴力革命の必然性を公然と声明してきた。マルクス主義は、暴力革命は社会主義社会を誕生させる助産婦であり、プロレタリアート独裁をブルジョアジー独裁におきかえるのにならざる通らなければならない道であり、プロレタリア革命の普遍的法則である、と指摘している。

マルクス主義は、国家そのものが暴力である、とわれわれに教えている。国家機構の主要な構成部分は軍隊と警察である。歴史上の支配階級はすべて、暴力にたよつて支配を維持していたのである。

いうまでもなく、プロレタリアートは平和裏に権力を獲得したいとのぞんでいる。だが、無数の歴史的経験が物語っているように、由来、反動階級はみずからすすんで権力をゆずりわたすものではない。かれらはいつともさきに暴力で大衆の革命運動を弾圧し、国内戦争をおこし、武装闘争を日程にのぼすのである。

レーニンはのべている。「歴史上の大革命で、国内戦争なしにすんだものはまだ一つもなかったし、まじめなマルクス主義者で国内戦争なしに資本主義から社会主義へ移行できることを考えたものは、一人もいなかった」(『予言』『レーニン全集』第二七巻)と。

レーニンのいう歴史上の大革命には、ブルジョア革命もふくまれている。ブルジョア革命は、ひとつの搾取階級がいまひとつの搾取階級をくつがえす革命であるが、それでも国内戦争なしにはすまされない。プロレタリア革命は、すべての搾取階級とすべての搾取制度を徹底的になくする革命であるから、このような革命は、国内戦争なしにはなおさら不可能である。

暴力革命がプロレタリア革命の普遍的法則であるという問題については、レーニンはつぎのようにくりかえし指摘している。「資本主義と社会主義のあいだには、ひじょうに長い『陣痛』の時期があり、暴力はつねに旧社会のため赤子をとりあげる助産婦である」(『古いものの崩壊におびえる人びとと新しいもののためにたたかう人びと』『レーニン全集』第二六巻)。「ブルジョア国家がプロレタリア国家(プロレタリアート独裁)にとつてかわられるのは、『自滅』の道を通じては不可能であり、通例、暴力革命によつてのみ可能である」(『たえず大衆を教育して、暴力革命をこのように認識させなければならぬ』また、暴力革命はこのようにしか認識することができない。これこそ、マルクスとエンゲルスの全学説の基礎である」(『国家と革命』『レーニン全集』

第二五巻)と。

スターリンもまた、プロレタリアートの暴力革命、プロレタリアート独裁は、資本に支配されるすべての国が社会主義への運動の「不可避的な、かつ必須の条件」(『わが党内の社会民主主義的偏向についての報告の結語』『スターリン全集』第八巻)であるとのべている。

暴力革命がなく、プロレタリアート独裁がなくても、ブルジョア制度を根本的に改造することができらうか。スターリンはこたえている。「それはあきらかにできないことである。もしブルジョアジーの支配に適したブルジョア民主主義制度のわく内で、平和的な方式でこのような革命をおこなうことができると考えるなら、それは精神分裂症か、神経異常か、さもなければ恥知らずにもプロレタリア革命を公然と裏切るものである」(『レーニン主義の諸問題によせて』『スターリン全集』第八巻)と。

毛沢東同志は暴力革命についてのマルクス・レーニン主義の原理にもとづき、プロレタリア革命とプロレタリアートの指導する人民民主主義革命の新しい経験にもとづいて、「鉄砲から政権が生まれる」という有名な論断をおこなった。

毛沢東同志はのべている。「階級社会では、革命と革命戦争は避けられないものである。これを放棄すれば、社会を飛躍的に発展させることができないし、反動的な支配階級をくつがえし

て、人民に政権をにぎらせることもできない」(『矛盾論』『毛沢東選集』第一巻)と。

毛沢東同志はのべている。「革命の中心任務と最高の形態は武力で政権をうばいとり、戦争で問題を解決することである。このマルクス・レーニン主義の革命原則はどこでも正しいものである。中国でも外国でも一様に正しいものである」(『戦争と戦略問題』『毛沢東選集』第二巻)と。

毛沢東同志はのべている。「帝國主義時代の階級闘争の経験がわれわれに物語っているように、労働者階級と勤労大衆はただ鉄砲の力にたよつてのみ、武装したブルジョアジーと地主にうち勝つことができる。この意味から、われわれは、全世界は鉄砲にたよつてのみはじめて改造できるのだということが出来る」(同上)と。

要するに、暴力革命はプロレタリア革命の普遍的法則である。これはマルクス・レーニン主義のもつとも重要な原理である。フルンチヨフは、ほかでもなくこのもつとも重要な問題でマルクス・レーニン主義を裏切つたのである。

われわれとフルシチヨフ修正主義との闘争

すでにフルシチヨフがソ連共産党第二十回大会でいわゆる「議会の道」をもち出しはじめたとき、中国共産党は、これはマルクス・レーニン主義の基本原則にそむく重大なあやまちであつ

て、せつたいに同意できないと考えた。

当時、フルシチヨフの修正主義はまだはじまつたばかりの段階にあり、また、ソ連共産党指導部も公然たる論戦をひきおこしていなかつたため、われわれはしばらくのあいだ、フルシチヨフの「議会の道」というあやまちを公然と暴露しなかつたし、批判もしなかつた。だが、われわれはフルシチヨフのあやまつた論点にたいし、われわれの文書と論文のなかでマルクス・レーニン主義の観点を正面からあきらかにした。また、兄弟党間の内部の会談と会議でも、われわれはフルシチヨフのあやまつた論点にたいし、必要で適切なたたかいをすすめた。

一九五六年九月、第八回全国代表大会にたいする中国共産党中央委員会の政治報告のなかで、われわれは中国革命の経験を総括してつぎのようにはつきりとのべている。

「わが党は平和改革をかちとる際に、警戒をおこたらず、人民の武装を放棄しなかつた」

「反動派とちがつて、人民は戦争をこのむものではない」「だが、どうしても武器をとらなければならぬ事態に追いやられたとき、人民が武器をとって立ちあがるのはまったく正しいのである。人民がこのような行動をとることに反対し、攻めてくる敵に屈服するよう人民に要求することは、日和見主義の路線にはかならない。こうしたときに革命の路線をとるか、それとも日和見主義の路線をとるかということは、六億の人民が時機の熟したときに政権を獲得すべきかどうか

かにかかわる大きな問題であった。わが党が革命の路線をとったため、こんにちの中華人民共和國をみるにいたったのである」

この問題について、中国共産党第八回全国代表大会のマルクス・レーニン主義的観点は、ソ連共産党第二十回大会の修正主義的観点にまっこうから対決するものである。

一九五六年十二月、われわれはまた、『ふたたびプロレタリアート独裁の歴史的経緯について』と題する一文のなかで、正面から十月革命の道をあきらかにしたが、実際には、フルシチョフのもち出した、十月革命の道と対立するいわゆる「議会の道」を批判したのである。

ソ連共産党の指導者とのあいだにおこなわれたたびたびの内輪の会談のなかでも、中国共産党中央委員会の指導的な同志は、フルシチョフのあやまった観点を厳粛に批判した。われわれは満腔の熱誠をもって、かれがあやまちをあらためることを望んだ。

一九五七年、各国共産党・労働者党代表者会議がひらかれたさいにも、資本主義から社会主義への移行の問題について、中国共産党代表団はソ連共産党代表団とはげしい論争をおこなった。

この会議の準備過程で、ソ連共産党中央委員会が提出した宣言の第一次草案は、平和的移行というひとつの可能性を提起するだけで、非平和的移行といういまひとつの可能性をまったく提起していなかった。この草案はまた、議会の道を提起するだけで、他のいかなる闘争形態もせんぜ

ん提起しておらず、その上、議会の道による権力獲得の望みを「共産主義者と社会民主主義者の共同一致の行動」のうえにかけていた。マルクス・レーニン主義にそむこうしたあやまった観点を各国の共産党・労働者党の綱領的な文書のなかに書きこむことに中国共産党中央委員会が同意できなかったのは、当然のことである。

中国共産党代表団が批判的な意見を出したのち、ソ連共産党中央委員会は宣言の第二次草案をもちだしてきた。この文書には非平和的移行の可能性についての字句がふやさねはしたが、しかし、平和的移行の問題についての定式は、あいかわらずフルシチョフがソ連共産党第二十回大会でもちだした修正主義的観点を反映するものであった。

中国共産党代表団は、これらのあやまった観点に同意しないことをはっきりと表明した。十一月十日、中国共産党代表団はソ連共産党中央委員会に、資本主義から社会主義への移行の問題にかんするわれわれの観点を体系的に説明するとともに、ソ連共産党中央委員会に書面による要綱を提出した。

われわれの書面による要綱のおもな論点はつぎのとおりである。

戦術的観点から、平和的移行の願望を提起するのは有益ではあるが、平和的移行の可能性を強調しすぎるのは妥当でない。いつでも反革命の襲撃を迎えつつ用意をしておかなければならず、

労働者階級が権力を奪取する革命の瀬戸ぎわにさいし、もしブルジョアジーが武力で人民の革命を弾圧してくるなら（一般的にいつてこれは必然的なことである）、武力でそれを打倒する用意をしておかなければならない。

議会闘争の形態は十分に運用しなければならぬ。だが、その役割には限度があり、もっとも重要なのは、革命の力をたくわえるという骨の折れる仕事をすすめるべきだということである。平和的移行をただ会議の多数によるということだけに解釈すべきではない。主要な問題は国家機構にかんする問題である。つまり、ふるい国家機構（主として武力）をうちくたさ、あたらしい国家機構（主として武力）をうちたてるという問題である。

社会党は社会主義の政党ではない。ごくいちぶの左派をのぞいて、それはブルジョア政党の一変種である。社会主義革命の問題で、われわれと社会党の立場は根本的にちがっている。この限界をあいまいにはならない。

われわれのこうした論点はマルクス・レーニン主義にまったく合致するものである。

当時、ソ連共産党中央委員会代表団の同志たちは、これらの論点に反対するすべもなかった。だが、かれらは再三われわれに、かれらの内部の事情を配慮してほしいと要求し、宣言草案の問題についての定式をソ連共産党第二十回大会の定式とつじつまがあうようにしてほしいと希望した。

望した。

中国共産党代表団は、われわれがすでにソ連共産党指導部のあやまつた観点を反ばくしており、また書面による意見要綱も提出してあることを考えたうえ、共同で敵にあたるため、われわれはソ連共産党の同志が再三もち出した希望をくんで、ソ連共産党中央委員会のこの問題にかんする原稿を基礎とすることに同意し、ただごくいちぶの個所にすこし改正をくわえただけである。われわれはもともと、ソ連共産党の同志がこの論争を通じて悔いあらため、自分のあやまちをあらためるよう望んでいた。だが、われわれの期待に反して、ソ連共産党指導部はその後も、かれらのあやまちをあらためなかつた。

一九六〇年の兄弟党会議でも、資本主義から社会主義への移行の問題について、中国共産党代表団はまたもやソ連共産党代表団とはげしい論争をくりかえし、フルシチョフの修正主義的観点を徹底的に暴露し批判した。会議の期間中、中ソ双方はそれぞれ自己の立場を堅持し、話をまとめることができなかつた。最後に、中国共産党代表団は、この会議で共同の文書をつくることを普遍的に要求している各国兄弟党の願いを考慮したうえ、この問題でまたもや譲歩し、ソ連共産党指導部の事情をもういちど配慮することにしたのである。われわれは、一九五七年の宣言の問題にかんするいくつかの段落の文字をそのまま一九六〇年の声明に書き込むことに同意し

た。また、われわれはこの会議で、一九五七年十一月十日の平和的移行の問題についての中国共産党の意見要綱を配布するとともに、これがソ連共産党指導部にたいする最後の配慮であり、こんご二度と配慮できないことを表明しておいた。

こんにち、もしもある同志が、当時ソ連共産党指導部にたいするわれわれのこうした配慮はあやまつていたと批判するなら、われわれはよろこんでこうした批判をうけいれるものである。

宣言と声明の平和的移行の問題についての定式はソ連共産党の原稿をもとにしたものであつて、いちぶの個所にソ連共産党第二十回大会の定式がのこされている。そのため、いくらか手入れをしたとはいえ、全般的な定式にはやはり重大な欠点とあやまちがある。この二つの文書は、支配階級がみずからすすんで権力をゆずりわたすものではないと指摘しておりながら、いちぶの資本主義国では国内戦争を経ないでも国家権力をうばいとることができるといい、議会外の広はんな大衆闘争をくりひろげて反動勢力の反抗をうちくくことを指摘しておりながら、議会での安定した多数を獲得して、議会を勤労人民に奉仕する道具に変えることができるといっている。また非平和的移行も提起してはいるが、暴力革命が普遍的法則であることを強調していない。ソ連共産党指導部はほかでもなく宣言と声明のこうした欠点とあやまちを利用して、フルシチョフの修正主義を売りさばくための口実にしてしているのである。

ここで、おごそかに声明しておかねばならないのは、一九五七年の宣言と一九六〇年の声明のなかの、資本主義から社会主義への移行の問題にかんする定式にたいし、中国共産党が一貫して自己の異なった意見を留保していることである。われわれはけつして自己の観点をかくさない。国際プロレタリアートの革命事業の利益のため、また各国兄弟党の綱領的な文書を修正主義者に利用させないためには、宣言と声明の問題の定式を、マルクス・レーニン主義の革命的原則にもとづき、各国共産党・労働者党の話し合いを通じて、あらためて是正する必要がある、とわれわれは考える。

中国共産党の問題についての全面的な観点を理解するのに資するため、われわれは、一九五七年十一月十日、中国共産党代表団がソ連共産党中央委員会に提出した平和的移行の問題についての意見要綱の全文を、この論文の付録としてもういちど発表することにする。

ここ八年らい、フルシチョフ修正主義にたいする全世界のマルクス・レーニン主義政党とマルクス・レーニン主義者のたたかいは、ひじょうに大きな発展をとげた。ますます多くの人びとが、フルシチョフ修正主義の正体を見やぶっている。だが、ソ連共産党指導部はいかかわらずさまざまの逃げ口上をさがしてこじつけ、あらゆる手をつくしてその商品を売りさばきつつある。

したがって、われわれはやはりかれらのいわゆる「平和的移行」についての曲論に反ばくをく

わかる必要がある。

奇弁で歴史を変えることはできない

ソ連共産党指導部はそのマルクス・レーニン主義にたいする裏切りをおおいかくし、その修正主義的路線を弁解するために、マルクスとレーニンの著作を公然とねじまげ、歴史を公然とねじまげている。

ソ連共産党指導部は弁解している。マルクスは、「イギリスとアメリカに平和的移行の可能性があると考えた」⑩ではないか、と。その実、この論拠は裏切り者カウツキーのところから拾ってきたものにはかならない。往年のカウツキーも、これとおなじ手ぐちでマルクスの観点をねじまげ、プロレタリア革命とプロレタリアート独裁に反対したものであった。

十九世紀の七十年代、マルクスはたしかに、アメリカ、イギリスのような国では、「労働者たちは平和な手段でその目的をとげることができるといったことがある。だが、その当時でさえ、マルクスはこれが例外であることを強く指摘していた。マルクスはいつている。「それにもかかわらず、われわれは、大陸の大多数の国々には、暴力がわれわれの革命のテコとなるべきだ」ということを認めるべきである」(マルクス『ハーグ大会閉会後のアムステルダム大衆集会における

演説」) マルクスはまた、つぎのようにもいつている。「イギリスのブルジョアジーは、自分たちがまだ表決権を独占しているあいだは、いつも多数の決議をうけいれる用意があると表明する。だが、いったんかれらが自分の生命にかかわる重大問題で少数の地位におかれたと考えるようになれば、われわれはここでも奴れい主の新しい戦争に見まわれることになるだろう、わたしはあなたにこのことを信じてもらいたい」(『K・マルクスとクワールドク紙通信員との談話の記録』『マルクス・エンゲルス全集』第一七巻)と。

レーニンは裏切り者カウツキーを批判して、こういつている。「マルクスが七十年代に、イギリスとアメリカは平和裏に社会主義へ移行する可能性があると考えたことを口実にするのは奇弁である。もうすこし通俗的にいえば、これは引用によって人をだますものである。第一に、当時においてすら、マルクスはこのような可能性を例外と考えていた。第二に、当時には独占資本主義、つまり帝国主義がまだあらわれていなかった。第三に、当時、イギリスとアメリカにはブルジョア国家機構のおもな機構としての軍閥制度がまだなかった(いまはある)」(『プロレタリア革命と背教者カウツキー』『レーニン全集』第二〇巻)と。

レーニンはいつている。帝国主義は、その根本的な経済的特徴から、「もつとも平和を愛せず、もつとも自由を愛せず、いたるところで軍国主義を最大限に発展させる」ことを決定づけら

れている。平和的変革あるいは暴力的変革の問題について語るばあい、「こんなことにさえ『気づかない』ようでは、ブルジョアジーのもっとも俗っぽい従僕になりさがってしまったも同然である」(『プロレタリア革命と背教者カウツキー』『レーニン全集』第二八巻)と。

こんにち、ソ連共産党の指導者はこともあろうにまたもやカウツキーの古くさい言いぐさをくりかえしている。これもまた、ブルジョアジーのもっとも俗っぽい従僕になりさがってしまったも同然ではなからうか。

ソ連共産党指導部はまた弁解している。レーニンは「原則のうえで平和革命の可能性を許した」^⑩ではなかったか、と。これはなおさら真正正銘の奇弁である。

レーニンは一九一七年の二月革命後のある期間、「ロシアでは、この革命が例外的に平和革命となるかもしれない」(『レーニン全集』第三五巻)と考えたことがある。レーニンがそれを「例外」と呼んだのは、当時、特殊の条件があつたからである。つまり、「武力が人民の手ににぎられていて、人民を制圧する外部からの力がなかつたということ、これが問題の実質であつた」(同上)。ところが、七月になると、反革命のブルジョア政府は武力によつて大衆を弾圧し、ペテルグラードの街頭を労働者と兵士の血で染めた。この事件ののち、レーニンは、「ロシア革命の平和的発展のすべての望みはまったく破滅してしまつた」(同上)と指摘している。一九一七

年十月、レーニンとボリシェビキ党は労働者と兵士をだんこ指導して武装蜂起をおこない、権力をうばいとつた。一九一八年一月、レーニンは、「いまや、階級闘争は国内戦争にかつた」(『レーニン全集』第二六巻)と指摘した。こうして、ソビエト国家はさらに三年半の革命戦争を経て、大きな犠牲をはらい、国内の反革命の叛乱と外国の武力干渉を粉碎してはじめて、革命の勝利をうちかためたのである。一九一九年、レーニンは、「十月革命のなかで、革命の暴力はかぎやかしい勝利をかちとつた」(『レーニン全集』第二九巻)とのべた。

いま、ソ連共産党指導部はこともあろうに、十月革命を、「あらゆる革命のなかでももっとも流血をみなかつた革命」^⑪であり、「ほとんど平和裏になしとげられた」^⑫などといひふらしている。これはまったく歴史的事実にそむくものである。このようなことをいったのでは、世界最初の社会主義国をつくりあげるため、血を流した革命の犠牲者に、きみたちはどうして顔むけができるだろうか。

われわれが世界の歴史には資本主義から社会主義へ平和裏に移行した先例がまだないと指摘すると、ソ連共産党指導部は、「平和な方式で社会主義革命をなしとげた実際の経験がある」といひ逃がれる。かれらは目をふさいで、「一九一九年、ハンガリーは平和な道を通じてプロレタリアート独裁をうちたてた」^⑬とデタラメをいうのである。

だが、事実ははたしてそうだろうか。いな、そうではない。当時のハンガリー革命の指導者ベラ・クンが事態の経過をいかに記しているかを、見てみよう。

ハンガリー共産党は一九一八年十一月に結成されたのである。この年青い党は結成と同時に、ただちに革命闘争に突入して、「ブルジョアジーを武装解除し、プロレタリアートを武装し、ソビエト権力をうちたてる」(ベラ・クン『ハンガリー・プロレタリア革命の教訓』) という社会主義革命のスローガンをうち出した。ハンガリー共産党は、労働者を武装し、政府の軍隊のなかで兵士を獲得し、復員軍人のなかで組織活動をすすめる、武装デモを組織し、労働者を組織して工場長を追い出し、企業を占領し、農業労働者を組織して大面積の土地を占領し、反動的な士官、反動的な部隊、反動的な警察を武装解除し、武装蜂起をストライキ闘争とむすびつけるなど、武装蜂起のためのさまざまな活動を積極的にすすめた。

じじつ、ハンガリー革命にはさまざまな形態、さまざまな規模の武装闘争がみちあふれていた。ベラ・クンはいつている。「共産党が結成してから権力を奪取するまでのあいだ、ブルジョア権力機関との武力衝突はずっとつづいており、しかも、いよいよひんぱんになっていた。一九一八年十二月十二日、ブダペスト警備部隊が武器をとって街頭にあらわれ、臨時政府の陸相に反対するデモをおこなったその日から、革命的な兵士、労働者と政府の武装部隊、とくに警察との

あいだにおこった流血の衝突について、新聞がこれを報道しなかつた日はおそらく一日もなかつたであろう。共産党員はブダペストだけでなく、各州でもたびたび蜂起を組織した」(ベラ・クン『プロレタリア革命はハンガリーでなぜ勝利をおさめたか』)と。ソ連共産党指導部がハンガリー革命を平和的移行だというのは真つ赤なウソである。

ソ連共産党の新聞・雑誌は、当時のハンガリーのブルジョア政府は「みずからすすんで辞職した」^②のだといっている。たぶん、これがソ連共産党指導部の唯一の根拠なのである。だが、事実はどうであつたらうか。

当時のブルジョア政府の首脳者カロイはじつにはつきりといっている。「わたしは、自分が辞職して、権力をプロレタリアートにゆずり渡すという宣言に署名した。その実、プロレタリアートはその前にすでに権力を奪いとつていたし、また権力をにぎつたことを宣言していたのである」「わたしは権力をプロレタリアートにゆずり渡したのではない。なぜなら、かれらは早くから計画的に社会主義の軍隊をつくり、権力を奪いとつていたからである」と。だから、ベラ・クンは、ブルジョアジーがみずからすすんで権力をプロレタリアートにゆずり渡したと考えるのは、欺瞞的な「神話」である(ベラ・クン『ハンガリー・プロレタリア革命の教訓』)と指摘している。

一九一九年、ハンガリー革命は失敗した。レーニンがかつて分析したところによると、ハンガリー革命失敗の最もとも主要な教訓は、年若いハンガリー共産党が致命的なあやまちをおかし、敵にたいして独裁を實行する面で断固さに欠け、決定的な瞬間に動搖をせめしたことである。また、農民の土地問題解決の要求をみたすための正しい措置をとらなかつたので、広はんな農民大衆から浮きあがつていった。そして、ハンガリー共産党が日和見主義の社会民主党と合併したことも、革命を失敗させた重要な原因であつた。

ソ連共産党指導部が一九一八年から一九一九年にかけてのハンガリー革命を「平和的移行」の典型といい張つてゐるのは、まったく歴史を偽造するものである。

ソ連共産党指導部はまた、チェコスロバキアの労働者階級は「平和な方式で権力をかちとつた」^②のだといはつてゐる。これもまた、滑稽なほどでたらめに歴史をねじまげるものである。

チェコスロバキアの人民民主主義権力は、反ファシッシュ戦争のなかでうちたてられたのであつて、ブルジョアジーの手から「平和裏に」かちとつたのではない。第二次世界大戦中、共産党は人民を指導して、ファシズムに反対する遊撃戦と武装蜂起をおこなうとともに、ソ連軍の援助のもとで、チェコスロバキア領内におけるドイツ・ファシストの軍隊およびその手先の権力をうち

たおし、民族戦線の連合政府をうちたてた。この政府は、実質的には、プロレタリアートの指導する人民民主主義独裁、つまりプロレタリアート独裁の一つの形態であつた。

一九四八年二月、チェコスロバキア国内の反動派はアメリカ帝國主義の支持をえて、反革命クーデターをたくらみ、武装反乱によつて人民の権力をくつがえす準備をすすめていた。だが、共産党の指導する政府は、ただちに武装力を動員するとともに、大衆の武装デモを組織し、ブルジョアジーの反革命的な復活の陰謀をうちくいだいた。事實はいともあきらかである。二月事件はけつして労働者階級が「平和裏」にブルジョアジーから権力を奪取したのではなく、労働者階級がすでに自己の手中にある国家機構を利用し、おもに自己の武装力によつて、ブルジョアジーの反革命クーデターを弾圧したのである。

ゴットワルトは二月事件をしめくつて、こういつてゐる。「二月事件のまえに、われわれがすでにのべておいたように、戦前の状況とくらべて基本的な変化のひとつは、国家権力がもはや従来の支配階級に奉仕するのではなく、いくつかの新しい階級に奉仕するものとなつてゐるといふ、まさにこの点にある。二月事件は、国家権力がこうした意味ですぐれた役割をはたしたことを物語つてゐる」(一九四八年十一月十七日、チェコスロバキア共産党中央委員会におけるゴットワルトの發言)と。

以上の事実をすべて「平和的移行」の先例であるなどと、どうしていいくるめることができるだろうか。

レーニンはこういつている。「カウツキーがすべての逃げ口上、奇弁、デッチあげを必要としているのは、ほかでもなく、暴力革命を回避するためであり、こうした革命にそむいたかれの行爲をおおいかくすためであり、自由主義的労働政策の側、つまりブルジョア側の側に移ったかれの行爲をおおいかくすためにはかならない」と。レーニンは、「問題の実質はここにあるのだ」(『プロレタリア革命と背教者カウツキー』『レーニン全集』第二八巻)といっている。

フルシチョフはなぜこれほど恥知らずにもマルクスとレーニンの著作をねじまげ、歴史をデッチあげ、欺瞞的な手段をもてあそぶのであろうか。問題の実質もまたここにあるのだ。

ウンで現実をおおいかくすことはできない

ソ連共産党指導部が革命に反対するその「平和的移行」の路線を弁護するにあたって、おもな口実としているのは、現代の歴史的条件が変わったということである。

第二次世界大戦ごの歴史的条件の変化にたいする評価と、そこからひきだされる結論については、マルクス・レーニン主義者とフルシチョフのあいだに根本的な相違がある。

マルクス・レーニン主義者は、第二次世界大戦後の歴史的条件には根本的な変化がおこったと考えている。こうした変化は、おもに、プロレタリアートの社会主義勢力が大きく発展し、帝国主義の勢力がひじょうに弱まったことにあらわれている。戦後、強大な社会主義陣営があらわれ、一連のあらたな民族独立国があらわれ、たえまなくつづく武力革命闘争がすすめられ、資本主義諸国における大衆運動のあらたな高まりがあらわれ、国際共産主義運動の隊列の大きな発展がみられた。国際プロレタリアートの社会主義革命運動とアジア、アフリカ、ラテンアメリカの民族民主革命運動は、現代におけるふたつの大きな歴史的潮流となっている。

毛沢東同志ははやくも大戦の直後、たびたびつぎのように指摘している。世界の力関係における優位は敵の側にはなく、われわれの側にある。こうした新しい状況は、「全世界の労働者階級と被抑圧民族の解放事業にいつそう広範な可能性と、いつそう現実的な道をきりひらくものであった」(『全世界の革命勢力は団結して帝国主義の侵略に反対せよ』『毛沢東選集』第四巻)と。

毛沢東同志はさらに指摘している。「攪乱、失敗、ふたたび攪乱、ふたたび失敗、さいごに滅亡——これが人民の事業に対処する、帝国主義と世界のいつさいの反動派の論理で、かれらはけつしてこの論理に反することはない。これはマルクス主義の法則である。われわれが『帝国主義はきわめて凶悪だ』というのは、その本性はあらためることのできないものだということをいっ

ているのである。帝国主義者は、その滅亡の日まで、けつして屠刀を捨てようとするものではなく、また、けつして成仏できるものではない」(『幻想をすてて、闘争を準備せよ』『毛沢東選集』第四巻)と。

マルクス・レーニン主義者は、戦後の歴史的條件が革命にいつそう有利であるという変化にもとづき、また、帝国主義と反動派の本性が変わるものでないという法則にもとづいて、革命の絶好の情勢を十分に利用し、それぞれの国ぐにの具体的な状況に応じて積極的に革命闘争の発展をうながし、革命の勝利をうばいとる準備をととのえなければならぬという結論をひきだしている。

ところが、フルシチョフは戦後の歴史的條件の変化を口実として、革命に反対し、革命を解消するといふ結論をひきだし、世界の力関係には変化がおこった、帝国主義と反動派の本性が変わった、階級闘争の法則が変わった、十月革命といふ共通の道が時代おくれになった、プロレタリア革命にかんするマルクス・レーニン主義の原理が時代おくれになった、と見ている。

フルシチョフらはアラビアン・ナイトのような神話をふりまいている。かれらはこういっている。「いまや、一連の資本主義国の労働者階級にとって、平和的な方式で社会主義革命を実現する有利な国際的、国内的條件が形成されつつある」⁽²⁴⁾と。

かれらはこういっている。「第一次世界大戦から第二次世界大戦までの期間において、ヨーロッパの多くの国ぐにの反動ブルジョアジーは警察・官僚機構をたえまなく発展させ、改善して、勤労者の大衆運動にむごたらしい弾圧をくわえた。だから、平和的な方式で社会主義革命を実現する可能性はなかった」と。いまでは、こうした状況もすでに変わったとかれらは考えている⁽²⁵⁾。

かれらはこういっている。いまや、「社会主義に有利である国際舞台での力関係の根本的な変化は、国際反動派による、革命をおこなう国ぐにへの内政干渉をマヒ状態におとしいられている」⁽²⁶⁾。「このため、ブルジョアジーが国内戦争をひきおこす潜在的な可能性は減少した」⁽²⁷⁾と。だが、フルシチョフらのウツで現実をおおいかくすことはできない。

第二次世界大戦ごの二つのきわだった事実は、帝国主義と各国の反動派がすべて暴力機構を強化して、人民大衆にむごたらしい弾圧をくわえていること、アメリカをかしらとする帝国主義がいたるところで反革命の武力干渉をおこなっていることである。

いま、アメリカはいっそう軍国主義化している。その軍隊は二七〇余万名まで拡充され、一九三四年の一一倍、一九三九年の九倍にふえている。その警察やスパイ機構の多い点では、アメリカのいちぶの大資本家でさえ、これは世界一であって、ヒトラー時代のドイツをはるかにしのぐ

ものがある、と認めている。

イギリスの常備軍は、一九三四年の二五万余名から一九六三年の四二万余名にふえ、警察官も一九三四年の六万七〇〇〇名から一九六三年の八万七〇〇〇名にふえている。

フランスの常備軍は、一九三四年の六五万余名から一九六三年の七四万余名にふえ、警察および保安部隊も一九三四年の八万余名から一九六三年の一二万名にふえている。

他の帝国主義国、さらには一般の資本主義国でも、例外なく、軍隊と警察力をぐっと強化している。

フルシチョフは全般的かつ完全な軍縮のスローガンで大衆をねむりこませることにもつとも熱をいれている。かれはここ数年らいひたすらこうしたじゆ文をとなえてきた。だが、現実の生活では、全般的かつ完全な軍縮など影も形も見えはしない。人びとが目にしてゐるのは、アメリカをかしらとする帝国主義陣営では、いたるところ全般的かつ完全な軍拡がおこなわれ、いたるところ暴力的弾圧機構の拡充と強化がすすめられていることである。

ブルジョアジーが平和な時期にこれほど必死になつてその軍隊と警察力を強化するのは、なぜであろうか。それは自国の勤労者の大衆運動を弾圧するためではなく、逆に、勤労者に権力を平和裏に獲得させるためのものだとでもいうのであろうか。戦後十九年らい、世界各国のブルジョ

アジーは軍隊と警察を使つて、ストに立ちあがつた労働者を弾圧し、民主的権利をもとめる人民大衆を弾圧してきた。こうした暴挙がまだ少なすぎるとでもいうのであろうか。

ここ十九年らい、アメリカ帝国主義は四〇余りの国とさまざまな軍事ブロックを結成し、さまざまな軍事条約を締結した。アメリカ帝国主義は国外に二二〇〇余の軍事基地と軍事施設をもつけ、資本主義世界全体にゆきわたつてゐる。アメリカ帝国主義が海外に駐留させてゐる兵力は、一〇〇余万名に達している。その「進撃司令部」は陸空軍連合の機動部隊を指揮しており、いついかなるときでも各地に出動して、人民革命に弾圧をくわえる準備態勢をととのえている。

ここ十九年らい、アメリカ帝国主義その他の帝国主義は、さまざまな方式で世界各国の反動派を支持して、各国人民の革命運動の弾圧に手をかしてきた。そればかりでなく、たびたび反革命的な武力侵略と干渉を直接に画策したり、おこなつたりした。つまり、反革命の輸出をおこなつてきた。アメリカ帝国主義についていうなら、かれらは中国で蔣介石をたすけて内戦をひきおこし、直接に出兵してギリシャの人民解放区攻撃を指揮し、朝鮮で侵略戦争をおこない、レバノンに部隊を上陸させてイラク革命をおびやかし、ラオスの反動派に支持と援助をあたえて内戦を拡大させ、国連軍なるものを編成、指揮してコンゴの民族独立運動を弾圧し、またキューバにたいして反革命的な侵入をおこなつた。かれらはいまもなおベトナム南部人民の解放闘争を弾圧して

いる。さきごろかれらはまた、パナマ人民の主権をまもる正義のたたかいを武力で弾圧したし、キプロスにたいする武力干渉にも一役を買っている。

アメリカ帝国主義はすべての人民革命と民族解放運動に容赦ない弾圧、干渉をくわえるばかりでなく、すこしでも民族主義的な色彩のあるブルジョア政権にたいしても、なんとかしてそれをくつがえそうとしている。ここ十九年らい、アメリカ政府は、アジア、アフリカ、ラテンアメリカのいちぶの国ぐにで、たびたび反革命クーデターを画策し、みずからの育成した手先、たとえばゴ・ジンジエムのようなやからでさえも、いつたん意にかなわぬとなれば、ただちに破れぞうりのごく投げすて、これを暴力の手段でとりのぞいてきた。

事実が物語っているように、こんにち、すべての被抑圧人民と被抑圧民族は、もし革命をおこない、解放をかちとろうとすれば、自国の反動支配階級の暴力的弾圧に対処せねばならないばかりでなく、帝国主義、とりわけアメリカ帝国主義からの武力干渉に対処する用意を十分にととのえておかねばならない。もしもこうした用意がなく、必要なときにだんこ革命の暴力をもって反革命の暴力に反撃をくわえないなら、革命などまったく問題にならないし、革命の勝利などなおさら問題にならない。

すでに独立をかちとつた国は、もしも自国の武装力を強化せず、帝国主義の武力侵略と干渉に

対処する準備をととのえず、反帝闘争の方針を堅持しないなら、民族の独立をまもることができないし、革命事業の発展を保証することはなおさらできない。

われわれはソ連共産党指導部にたずねたい。きみたちはふたこと目には戦後の情勢の新しい特徴についてまくしたてるのに、アメリカ帝国主義その他の帝国主義がいたるところで革命を弾圧しているこのきわめて重要な、きわめてあきらかな特徴については、なぜことさらにこれを抹殺しようとするのか。きみたちはひっきりなしに平和的移行を口にはしているが、帝国主義と反動派の膨大な暴力的弾圧機構にいかに対処すべきかについてはまったく口をつぐんでいる。これは一体どうしたわけなのか。きみたちは、帝国主義と各国の反動派が民族解放運動と人民革命運動にむごたらしい弾圧をくわえているこの血まみれの現実を公然とおおいかくし、かざりたてて、被抑圧民族と被抑圧人民は平和裏に勝利をかちとりうるという幻想をばらまいている。これではあきらかに、各国人民の警戒心をねむりこませ、中味のない美しい未来図で怒りにもえる大衆をなだめ、かれらが革命をおこなうことに反対し、事実上において帝国主義と各国反動派の共犯者となつてしまつていてはいないか。

この問題では、いまはなきアメリカの前國務長官ダレスにもういちど反面の教師となつてもらうのも、大いに有益なことであらう。

ダレスは一九五六年六月二十一日の演説で、これまで、すべての社会主義国はことごとく「暴力行使によって」うちたてられたものである、といった。かれはつづけて、「いま、ソ連の支配者は暴力行使をやめるといつている」といい、ダレスは、「われわれはこうした事態の発展を歓迎し、これを激励するであらう」^②と表明したのである。

資本主義制度の忠実な擁護者としてのダレスは、あきらかに、階級闘争における暴力の重要な役割をよく知っていた。ダレスは、暴力革命を放棄するというフルシチョフの主張を歓迎する一方、ブルジョアジーは反革命の暴力をつよめてその支配をまもらねばならないと口をきわめて強調した。かれは別の演説でこういつている。「政府のあらゆる任務のうちで、もつとも基本的なものは、その公民（反動的支配階級と読まねばならない）を暴力からまもることである」^③「だからこそ、どの文明社会でも、社会の成員は応分の力を出して法治の武器としての警察部隊を維持しているのである」^④と。

ダレスのこの話に、いつわりはない。帝国主義とすべての反動派の支配の政治的基礎は、ほかでもなく「警察部隊」である。この基礎にさえふれなければ、他はすべてどうでもよいことであり、かれらの支配をゆさぶるものではない。ソ連共産党指導部は、ブルジョアジーが暴力にたよって支配している事実をかくせばかくすほど、またダレスに歓迎されたかれらの平和的移行の神話をつらふにまげばふりまくほど、帝国主義の側に立つて革命に反対しているその正体をますますさらけ出すことになるのである。

いわゆる「議会の道」を反ばくする

第二インターナショナルの修正主義者がいふらした「議会の道」という主張は、早くからレーニンによって批判しつくされ、その破産を宣告されたものである。だが、フルシチョフにとっては、第二次世界大戦後、いわゆる「議会の道」がにわかにかに靈驗あらたかなものになったようにみえる。

はたして、事実はそのとおりであろうか。もちろん、そうではない。

第二次世界大戦後の歴史的事実がいちだんと明らかにしているように、ブルジョア国家機構の主要な構成部分は、議会ではなく、武力である。議会はブルジョア支配の飾りものであり、びよぶであるにすぎない。ブルジョアジーが議会制を実施するかそれとも廃止するか、議会に比較的大きな権限をあたえるかそれとも比較的小さな権限をあたえるか、このような選挙法をとるかそれともあのような選挙法をとるか、これらのことはつねに、ブルジョア支配の必要と利益によって決定されるのである。ブルジョアジーが軍事・官僚機構を手中におさめているという条件の

もとで、プロレタリアートが選挙をつうじて、「議会での安定した多数」を獲得しようとすることは、不可能か、あるいはあてにならないことである。「議会の道」をつうじて社会主義を実現することは、まったく不可能なことであり、みずからをあげむき、人をあげむくものというべきである。

資本主義諸国の共産党のうち、いまなお約半数が非合法状態におかれている。合法的地位さえもつていないこれらの党にとつて、議会での多数を獲得するなどということが、まったく問題にならないのは、いうまでもない。

たとえば、スペイン共産党はこれまでずっと白色テロのもとにおかれており、選挙に参加することさえできない。ところが、イバルリのようなスペイン共産党の指導者までが、フルシチョフに追従してスペインでの「平和的移行」をいふらしているのは、でたらめなことであり、悲しむべきことであるというほかはない。

いちぶの資本主義国では、共産党は合法的地位を獲得しており、選挙に参加することができる。だが、ブルジョア支配のもとで、しかも、ブルジョア選挙制によるさまざまな不公平な制約のもとで、共産党が多数の票を獲得することはひじょうに困難である。たとえ多数の票を獲得したとしても、ブルジョアジーはなお選挙法改定などの手段をもちいて、共産主義者に議会で多数

を占めさせないようにすることができる。

たとえば、大戦後、フランス独占ブルジョアジーはかつて選挙法を二度改定し、フランス共産党の議席を二回にわたって大幅に減少させた。一九四六年の選挙で、フランス共産党は一八二の議席を獲得した。ところが一九五一年の選挙にあたって、独占ブルジョアジーは選挙法を改定し、その結果、フランス共産党の議席はにわかにな〇三にまで減少した。すなわち、七九の議席を失ったのである。一九五六年の選挙では、フランス共産党は一五〇の議席を獲得した。ところが、一九五八年の選挙にさいして、独占ブルジョアジーはまたもや選挙法を改定し、その結果、フランス共産党の議席はにわかにな〇議席にまで減少した。すなわち、一四〇の議席を失ったのである。

たとえば、なんらかの状況のもとで、共産党が議会で多数の議席を獲得するか、あるいは選挙の勝利によつて政府に参加したとしても、これは、決して議会や政府のブルジョア的性格が変わったことを意味するわけではない。ましてやふるい国家機構をうちくだし、新しい国家機構を樹立したことを意味するものではない。ブルジョア議会や政府にたよつて、根本的な社会変革を実行しようとすることは、絶対に不可能である。国家機構をにぎっている反動的ブルジョアジーは選挙の無効を宣告し、議会を解散することができる。また共産主義者を政府からしめだし、共産党

の非合法を宣告し、野蛮な暴力手段にうったえて人民大衆と進歩勢力を弾圧することができる。たとえば、一九四六年、チリ共産党はブルジョア急進党を支持して選挙に勝ち、共産主義者をふくむ連合政府を組織した。当時、チリ共産党の指導者はこともあろうに、ブルジョアジーの手中にあるこの政府を「人民民主主義政府」とよんだ。ところが、一年もたたぬうちに、ブルジョアジーは共産主義者にせまって政府からしりぞかせ、共産主義者の大検挙をおこない、そのうえ、一九四八年には共産党の非合法を宣告したのである。

労働者の政党がブルジョア御用政党に墮落、変質した場合、ブルジョアジーは、このような党が議会で多数の議席をしめることをゆるすことはありうるし、政府を組織することをゆるすこともありうる。たとえば、いくつかの国におけるブルジョアの性格をもった社会民主党がそのとおりである。だが、これはただブルジョアジー独裁をまもり、かためるだけのことであつて、プロレタリアートの抑圧され搾取される地位にはなんらの変化ももたらさないし、またもたらさうるものでもない。こうした事實は、「議会の道」の破産をよりいっそう実証したものにほかならない。

第二次世界大戦ごの歴史的事實はさらに、つぎのことをあきらかにしている。共産党の指導者がいわゆる「議会の道」を信じ、「議会議主義的クレチン病」という不治の病にとりつかれたならば、もはやその望みがかなぬばかりでなく、かならず修正主義のどろ沼にはまりこみ、プロレタリアートの革命事業をほうむりさるであろう。

ブルジョア議会にたいしてどういう態度をとるかという問題で、マルクス・レーニン主義者と日和見主義者、修正主義者とのあいだには、ゆらい根本的な意見の相違が存在している。

マルクス・レーニン主義者は一貫してこう考えている。プロレタリア政党は一定の条件のもとで、議会闘争に参加し、議会の演壇を利用して、ブルジョアジーの反動的な本質をあばき、人民大衆を教育し、革命的な力をたくわえるべきである。こうした合法的闘争手段を利用すべきときに利用しないのは、誤りである。だが、プロレタリア政党はけつして議会闘争をプロレタリア革命にすりかえてはならないし、「議会の道」をつうじて社会主義に移行することを夢みてはならない。どんなときでも、プロレタリア政党はその主要な注意力を大衆闘争にそがねばならない。

レーニンはどういつている。「選挙やさまざまな党派の議会内での闘争をつうじて大衆を教育する目的を達成するために、ブルジョア議会の活動に参加することは、革命的なプロレタリア政党にとって必要なことである。だが、階級闘争を議会闘争に限定するか、あるいは議会闘争を最高の、決定的な、その他すべての闘争形態を支配する闘争とみなすならば、それは事実上、ブル

ジョアジの立場に移つて、プロレタリアートに反対することになる」（『憲法制定議会の選挙とプロレタリアート独裁』「レーニン全集」第三〇巻）と。

レーニンはかつて、第二インターナショナルの修正主義者が議会制の幻想に熱中して、権力奪取の革命的任務を放棄し、プロレタリア政党を選挙のための党に変え、議会のための党に変え、ブルジョアジの従属物に変え、ブルジョアジー独裁をまもる道具に変えている、と非難したことがある。いま、フルシチョフとその追従者たちは「議会の道」をいいふらしているが、かれらもまた第二インターナショナルの修正主義者の二の舞いを演じるだけであろう。

いわゆる「左翼日和見主義反対」を反ばくする

ソ連共産党中央委員会の公開書簡はプロレタリア革命の問題にふれたとき、根も葉もない嘘八百をならべて、中国共産党は革命の情勢が存在していても「ただちにプロレタリア革命をおこなえというスローガンを提起する」ことを主張し、「資本主義諸国の勤労人民の民主的権利と切実な利益をかちとるためのたたかい」を放棄することを主張し^⑧、武装闘争を「絶対化」している^⑨、などといっている。かれらは、つねづね中国共産党に「左翼日和見主義」だとか、「極左冒険主義」だとか、「トロツキズム」などというレッテルをやたらにはりつけている。

その実、ソ連共産党指導部がこのようにわめきたてるのは、革命に反対し、革命を解消するかれらの修正主義路線を援護しようとしているにほかならない。かれらが攻撃しているいわゆる「左翼日和見主義」は、ほかでもなく、まさにマルクス・レーニン主義の革命路線なのである。

われわれは一貫して、革命は意のままにつくりあげられるものではなく、革命の客観的情勢が存在しない限り、革命はおこりえないと考えている。だが革命の発生とその勝利は、革命の客観的情勢を必要とするばかりでなく、革命の主体的力の準備と行動をも必要とする。

もし革命の客観的情勢と革命の主体的要因を正しく評価せず、革命情勢のまだ熟していないときに、プロレタリア政党がかかるはずにも革命をおこすならば、それこそ極「左」冒険主義である。もし革命情勢があらわれていないときに、革命の準備活動を積極的にするすめないならば、あるいは革命情勢がすでにあらわれ、革命の条件が熟しているときに、プロレタリア政党が敢然と革命を指導せず、権力を奪取しないならば、それこそ右翼日和見主義であり、修正主義である。

権力奪取の時機が到来するまでのプロレタリア政党のもっとも根本的な、そしてもっとも重要な課題は、自己のすべての注意力を、革命の力をたくわえるという骨の折れる仕事に集中することである。日常闘争を積極的に指導する中心の目的は、革命の力をたくわえ、条件が熟したとき

に革命の勝利をかちとる準備をととのえることにある。プロレタリア政党内は日常的な各種の形態の闘争を通じて、プロレタリアートと人民大衆の自覚をたかめ、みずからの階級の隊列を訓練し、自己の戦闘力をきたえあげ、思想、政治、組織、軍事の面で革命の準備をぬかりなくおこなわなければならない。こうしてこそ、革命情勢が熟したときに、機を逸せず革命の勝利をかちとることができるのである。そうでなければ、たとえ革命の客観的情勢が存在していたとしても、みすみす革命の時機を逸するであろう。

ソ連共産党指導部は、革命情勢が到来していないときに、プロレタリア政党内に日常的な革命闘争をおこない、革命の力をたくわえるべきかということを回避して語ろうとはせず、ふたこと目には革命情勢が存在しなければ革命をやるべきでないと強調している。実際には、かれらは革命情勢が存在しないという口実で革命の力をたくわえ、革命の準備をととのえる任務を根底から解消しているのである。

レーニンはかつて、背教者カウツキーの革命情勢にたいする態度をきわめていきいきと描きだしている。カウツキーにとつては、革命情勢が「もしやつてきたなら、かれもまた革命家になりたがるだろう！ だが、そのときには——注意しておくが——どの悪党も革命家と自称しはじめるであろう！」もしやつてこなかったならば、カウツキーは革命に背を向ける！」と。レー

ニンはまた指摘している。カウツキーは典型的な小市民的俗物に似ている。ところが、革命的マルクス主義者が小市民的俗物と異なる点は、「プロレタリアートとすべての勤労被搾取大衆に革命の準備をさせる」能力をもちあわせていることである（『プロレタリア革命と背教者カウツキー』『レーニン全集』第二八巻）と。フルシチョフとその追従者がレーニンの指摘したカウツキーばりの小市民的俗物に似ているかどうか、くらべてみるのもいいだろう。

われわれは、一貫してこう考えている。資本主義諸国では、プロレタリア政党内は労働者階級とその他の勤労人民を積極的に指導して、独占資本反対の闘争、民主的権利擁護の闘争、生活条件改善の闘争、帝国主義の軍備拡張と戦争準備反対・世界平和擁護の闘争をおこなうとともに、被抑圧民族の革命闘争を積極的に支持すべきである、と。

アメリカ帝国主義の侵略、支配、干渉、侮辱をうけているすべての資本主義国では、プロレタリア政党内は反米の旗を高くかかげて、大衆闘争の主要な打撃のほこききき、アメリカ帝国主義にむけ、また、民族の利益を売りわたす独占資本家グループと国内のその他の反動勢力にもむけなければならない。プロレタリア政党内は、団結できるすべての勢力を団結させて、アメリカ帝国主義とその手先に反対する統一戦線を結成しなければならない。

ここ数年らい、多くの資本主義国の労働者階級とその他の勤労人民は、大規模な大衆闘争をく

りひろげてきた。これはひとり自国の独占ブルジョアジーやその他の反動勢力への打撃であるばかりでなく、アジア、アフリカ、ラテンアメリカ諸国人民の革命闘争にたいする力強い支持であり、また社会主義陣営諸国にたいする力強い支持でもある。これにたいして、われわれはこれまで十分な評価をあたえてきたのである。

共産主義者は当面の闘争を積極的に指導するにあたって、当面の闘争を長い目でみた、全局的な利益のための闘争と結びつけるべきである。また、プロレタリアートの革命精神で大衆を教育し、たえず大衆の自覚をたかめ、革命の力をたくわえるべきである。それによって、革命の時機が熟したときに革命の勝利を勝ちとるようにせねばならない。われわれのこの観点はマルクス・レーニン主義にまったく合致したものである。

マルクス・レーニン主義者の観点に反して、ソ連共産党指導部は、「高度に発達した資本主義国では、民主主義的任務と社会主義的任務がこなすにすぎまなくからみあっているため、そこに境界線などをひく可能性は、ひじょうに少ない」^⑧といふらしている。これは、当面の闘争をもつて長期の闘争に、改良主義をもつてプロレタリア革命にすりかえるものにはかならない。

レーニンはこうのべている。「いかなる改良も、それが大衆闘争という革命的な方法に支持されなければ、強固で、真実で、着実なものとはなりえない」。労働者階級の政党が「改良のためのこの闘争を労働運動の革命的方法とむすびつけなければ、それは一つの分派となり、大衆から浮きあがる可能性がある。そしてそれは、真の革命的な社会主義運動の成功にとつてきわめて重大な脅威である」(『社会主義宣伝連盟の書記へ』『レーニン全集』第二巻)と。

レーニンはまたつぎのようにいっている。「自覚した労働者からみれば、いかなる民主的要求もすべて、社会主義の最高の利益に従属するものである」(『マルクス主義の戯画と「帝国主義的経済主義」とについて』『レーニン全集』第三巻)レーニンは『国家と革命』のなかでエンゲルスのことばを引用して、こういっている。目先の一時的な利益のために根本の目的をわすれ、一時的な成果だけをおつてあとの結果を考えず、目先のために将来の運動を犠牲にするならば、これこそ日和見主義であり、しかも、危険な日和見主義である、と。

まさにこのためにレーニンが、カウツキーは「改良主義をほめたたえ、帝国主義ブルジョアジーへの隷属をほめたたえて、革命を非難し、これを否認している」と批判したのである。レーニンはいっている。「プロレタリアートは革命的手段で帝国主義ブルジョアジーを打倒する」、ところがカウツキーは、「帝国主義に隷属するという条件のもとで、改良主義的手段で、帝国主義を『改善』し、帝国主義に順応している」(『プロレタリア革命と背教者カウツキー』『レーニン全

集』第二八巻)と。

レーニンのカウツキーにたいする批判は、ソ連共産党指導部のこんにちの姿をそのままうつし出したものである。

われわれは一貫してこう考えている。プロレタリア政党は労働者階級と人民大衆を指導して革命をおこなうために、たくみにすべての闘争形態を自分のものとし、さまざまな闘争形態をむすびあわせ、闘争情勢の変化にもとづいて、すみやかにある闘争形態を他の闘争形態にとりかえなければならぬ。プロレタリア政党は、すべての闘争形態、すなわち平和と武装、公然と地下、合法と非合法、議会と大衆、国内と国際などの闘争形態を自分のものとしてこそ、はじめていかなる事態のもとでも不敗の地位に立つことができるのである。

中国革命の勝利は、中国の共産主義者が国際プロレタリアートの闘争の歴史的経験をくみとり、中国革命の具体的特徴にもとづいて、たくみに全面的にさまざまな闘争形態を自分のものとした結果にほかならない。中国革命の主要な闘争形態は武装闘争であった。だが、さまざまな形態の闘争のくみあわせがなかったならば、中国革命も勝利をおさめることができなかつたであろう。

中国革命の過程において、中国共産党は二つの戦線での闘争をおこなった。右翼合法主義に反

対するとともに、極「左」非合法主義に反対し、合法闘争と非合法闘争を正しくむすびつけた。われわれは全国的な規模で革命根拠地での闘争を国民党の支配地域での闘争と正しくむすびつけ、国民党の支配地域においてはまた、公然活動を地下活動と正しくむすびつけ、合法活動の可能性を十分に利用すると同時に、地下活動についての党の諸規定を厳格にまもった。中国革命は自国の具体的状況に適した、ひじょうに複雑で豊富な一連の闘争形態をつくりあげた。

中国共産党はみずからの長期にわたる実践の経験にもとづいて、つぎの点を十分心得ている。すべての合法闘争を拒否し、党活動をせまいワクのなかに局限し、党を大衆から浮きあがらせることは誤りである、と。だが、どんなときでも、修正主義者の売り歩く合法主義を容認することはできない。修正主義者は武装闘争と一切の非合法闘争を拒否し、ただ合法闘争と合法活動をおこない、党活動と大衆闘争を支配階級のゆるす範囲内にだけ限っている。そしてかれらは、党の基本綱領をひき下げ、はてはこれを放棄し、革命を放棄し、反動派の法律に折り合っていくのである。

まさにレーニンが批判しているとおり、カウツキー流の修正主義者は、ブルジョアの合法性によつて腐りはて、正気を失っている。「かれらは現行の治安法規のゆるす組織を保存するため、このとるにたりない小さな利益をむさばるため、革命をおこなうプロレタリアートの権利を売り

わたしているのである」(『第二インターナショナルの崩壊』『レーニン全集』第二一巻)

ソ連共産党指導部とその追隨者たちは、口先ではさまざまな闘争形態を利用するといっているが、実際は合法主義を主張し、しかも、闘争形態の変化を口実にプロレタリア革命の目標を放棄している。これもまた、カウツキー主義をもってレーニン主義とすりかえるものである。

ソ連共産党指導部はまた、しばしばレーニンの偉大な著作『共産主義運動における左翼小児病』を利用して、かれらのあやまった路線を弁護し、中国共産党攻撃の「根拠」としている。

これはもちろんむだ骨である。レーニンのこの著作は、かれのその他の著作と同じように、マルクス・レーニン主義者がさまざまな日和見主義に反対するための武器となりうるだけであつて、けつして修正主義者が自分を弁護するための道具とはなりえない。

当時、レーニンが「左翼」小児病を批判したのは、第二インターナショナルの修正主義と決裂し、第三インターナショナルを結成したのちで、プロレタリア政党内に革命戦術をたくみに運用して、よりよく革命の準備をととのえるよう要求するためであつた。

ほかならぬこの著書のなかで、レーニンは、当時の国際労働運動の主要な敵はカウツキー流の日和見主義であると指摘した。なによりもまず修正主義ときっぱり手をきらなければならぬ。そうしてのち、はじめていかに革命戦術の把握を学びとるかを問題にすることができると、レ

ニンはくりかえし語っている。

レーニンが批判した「左翼」小児病の誤りを犯した同志たちは、ともかく革命をもとめていた。ところが、こんにちの修正主義者フルシチョフは革命に反対している。したがって、かれはカウツキーの部類にいれるほかはなく、「左翼」小児病に反対する問題について語る資格はぜんぜんないのである。

ソ連共産党指導部は中国共産党に「トロツキズム」というレッテルをはりつけたが、これはなおさらでたらめなほはだしいことである。事実上、トロツキズムの衣鉢をうけついで、こんにちのトロツキストたちと立場をともにしているのは、ほかでもなく、まさにフルシチョフなのである。

トロツキズムはそれぞれの問題でちがつたあらわれ方をする。しかも、つねに「極左」の仮面をつけているが、その本質は革命に反対し、革命を解消するものである。

プロレタリア革命とプロレタリアート独裁に反対するといふもつとも根本的な問題では、トロツキズムと第二インターナショナルの修正主義は、実質的には同じ穴のむじなである。だから、スターリンはたびたびこう指摘している。トロツキズムはかたちを変えたメンシェビズムであり、カウツキー主義であり、社会民主主義であり、反革命的ブルジョアジーの前衛である、と。

こんにちのフルシチョフ修正主義の実質もまた、革命に反対し、革命を解消することにある。したがって、ただつぎのような結論をひきだせるだけである。フルシチョフ修正主義は、カウツキー主義と同じ道をあゆんでいるばかりでなく、トロツキズムともいきつくさきは同じである。「トロツキズム」というレッテルは、やはりフルシチョフが自分自身にはりつけた方がよからう。

二つの路線、二つの結果

歴史はもつともたしかな証人である。戦後このかた、国際共産主義運動と各国人民の革命闘争は、ゆたかな経験をつんでいる。そのなかには成功の経験もあれば、失敗の経験もある。各国の共産主義者と革命的人民は、これらの歴史的経験のなから、正しい結論をひきだす必要がある。

戦後このかた、東ヨーロッパ、アジア、ラテンアメリカの一連の国々における社会主義革命の勝利は、ことごとくマルクス・レーニン主義の革命路線にしたがい、十月革命の道にそってかちとられたものである。現在では、十月革命の経験のほかに、中国革命の経験、東ヨーロッパ社会主義諸国の革命の経験、朝鮮革命の経験、ベトナム革命の経験、キューバ革命の経験などがあ

る。これらの国々における革命の勝利は、マルクス・レーニン主義をゆたかにし、発展させ、十月革命の経験をゆたかにし、発展させた。

中国をはじめキューバなどの国々には一つの例外もなくすべて、武装闘争を経、帝国主義の武力侵略と干渉への反対を経て、はじめて革命の勝利をかちとったのである。

中国人民は二十二年間にわたる革命戦争を経て、最後の三年間の人民解放戦争で、アメリカ帝国主義が全力をあげて支援した蔣介石反動派を徹底的にうちやぶり、はじめて中国革命の勝利をかちとったのである。

朝鮮人民は三十年代から十五年間にわたって、日本帝国主義に抵抗する革命的武装闘争をすすめ、みずからの革命的武装力をつくりあげ、発展させ、ついにソ連軍の援助のもとに勝利をおさめた。そして朝鮮民主主義人民共和国成立後、またもや三年間にわたってアメリカ帝国主義の武力侵略に抵抗する戦争をおこない、はじめて革命の勝利をうちかためたのである。

ベトナム人民は一九四五年八月の武装蜂起を経て、権力を奪取し、つづいて八年間にわたってフランス帝国主義に抵抗する民族解放戦争をおこない、そのうえ、アメリカ帝国主義の軍事的干渉を粉碎して、はじめてベトナム北部で勝利をおさめた。そして現在、ベトナム南部の人民はなお、アメリカ帝国主義の武力侵略にたいして英雄的な闘争をおこなっている。

キューバ人民は一九五三年に武装蜂起を開始し、そのごまた、二年あまりの人民革命戦争を経て、キューバにおけるアメリカ帝国主義とその手先バチスタの支配をくつがえした。そして革命の勝利をかちとつたのち、キューバ人民はさらにアメリカ帝国主義の雇い兵の武力侵入を粉碎し、革命の成果をまもつたのである。

その他の社会主義国の樹立もことごとく武装闘争を経たのである。

第二次世界大戦以後、中国をはじめキューバなどの一連の国ぐにで、プロレタリア革命が成功しえたもつとも主要な経験はなんであろうか。

第一に、暴力革命がプロレタリア革命の普遍的法則であること。プロレタリアートはかならず武装闘争を経て、ふるい国家機構をうちくだし、プロレタリアート独裁をうちたてなければならぬ。そうしてこそ、はじめて社会主義への移行を実現することができるのである。

第二に、農民がプロレタリアートのもつとも信頼できる同盟軍であること。プロレタリアートはかならずしつかりと農民に依拠し、労農同盟を基礎とする広範な統一戦線をうちたて、革命におけるプロレタリアートのヘゲモニーを堅持しなければならない。

第三に、アメリカ帝国主義が世界各国人民の革命の主要な敵であること。プロレタリアートはかならず反米の民族の旗を高くかかげ、敢然としてアメリカ帝国主義と自国におけるその手先に

たいして断固たる闘争をおこなわなければならない。

第四に、被抑圧民族の革命が、プロレタリア革命の欠くことのできない同盟軍であること。全世界のプロレタリアートは団結しなければならない。全世界のプロレタリアートはすべての被抑圧民族と団結し、帝国主義およびその手先に反対するすべての勢力と団結して広範な国際的統一戦線を結成しなければならない。

第五に、革命をおこなおうとするからには、かならず革命党がなければならないこと。プロレタリア革命の勝利、プロレタリアート独裁の勝利は、マルクス・レーニン主義の革命理論と革命的気風にもとづいて樹立された革命的プロレタリア政党なしには、修正主義や日和見主義にたいしてあくまで非妥協的な態度をとり、反動的支配階級およびその国家権力にたいして革命的な態度をとる党なしには、不可能である。

革命的武装闘争を堅持することは、ひとりプロレタリア革命にとつて第一に重要であるばかりでなく、被抑圧民族の民族民主革命にとつても第一に重要なことである。アルジェリア民族解放戦争の勝利は、この面で一つの手本を示している。

戦後における各国プロレタリア政党の全歴史は、つぎのことを物語っている。革命的路線を實行し、正しい戦略と戦術をとり、積極的に人民大衆を指導して革命闘争をすすめる党はすべて、

革命事業を一步一步勝利にみちびくことができ、党勢のめざましい発展をもちとることができ、これに反して、革命的でない日和見主義路線をとり、フルシチョフの「平和的移行」の路線をうけいれる党はすべて、革命事業に重大な損害をもたらし、みずからの党をまったく生氣のない改良主義の党に変え、ひいては完全に墮落、変質し、プロレタリアートに反対するブルジョアジーの道具になりさがってしまう。このような例はすくなくないのである。

かつて革命的意欲にあふれていたイラク共産党の同志たちは、外部からの圧力でフルシチョフの修正主義路線をむりやりにおしつけられたため、反革命にたいする警戒心をうしなってしまう。そして、反革命クーデターのおかげで、いちぶの党指導者は英雄的な死をとげ、幾千幾万のイラクの共産黨員と革命的大衆は無残にも殺害され、強大なイラク共産党はちりぢりにされ、イラクの革命事業は重大な挫折をこうむった。これはプロレタリア革命史上のいたましい血の教訓である。

アルジェリア共産党の指導部は、まったくフルシチョフとフランス共産党指導部の指揮棒にふりまわされるままに、武装闘争に反対する修正主義路線をうのみにした。だが、アルジェリア人民はこれに耳をかそうとはせず、決然と帝国主義に反対し、民族の独立をめざし、七年余の民族解放戦争を経て、ついにフランス政府にアルジェリア独立の承認をよぎなくさせた。そして、ソ

連共産党指導部の修正主義路線に追従したアルジェリア共産党は、アルジェリア人民の信頼をうしない、アルジェリアの政治生活におけるみずからの地位をうしなってしまう。

キューバ革命にさいし、当時のキューバ人民社会党のいちぶの指導者は、マルクス・レーニン主義の革命路線、革命的武装闘争の正しい路線を主張するのではなく、フルシチョフの修正主義路線に追従して「平和的移行」を主張し、暴力革命に反対した、このような状況のもとで、カストロ同志を代表とするキューバの党外と党内のマルクス・レーニン主義者は、当然のこととして暴力革命に反対する指導者を相手にせず、革命的なキューバ人民の側にたち、革命をめざし、革命をすすめる、ついに偉大な歴史的意義をもつ勝利をかちとったのである。

トレーズを代表とするフランス共産党のいちぶの指導者は、長いあいだにわたって修正主義路線を実行し、フルシチョフの指揮棒にしたがって「議会の道」をいいふらし、共産党を事実上社会民主党にまでひきさげてしまった。かれらは人民大衆の革命的要求を積極的に支持せず、アメリカ帝国主義反対の民族の旗をなげすててしまった。この修正主義路線を実行した結果、かれらは、かつて人民大衆のあいだでひじょうに大きな影響力をもっていた共産党を、ますます人民大衆から浮きあがらせ、ますます衰退させたのである。

ダンゲを代表とするインド共産党のいちぶの指導者は、長いあいだにわたって、修正主義路線

を實行し、革命の旗をなげすて、人民大衆の民族民主革命闘争を指導しなかつた。ダンゲ一味は修正主義の道にそつて一步一步転落し、民族排外主義者に墮落し、インドの大地主、大ブルジョアジーの反動的政策の道具となり、プロレタリアートの裏切り者になりはてた。

事実がはつきりと物語っているように、二つの根本的に異なる路線は、二つの根本的に異なる結果をもたらしている。これらの経験と教訓は、深く考えさせられるものがある。

ブラウダー、チトーからフルシチョフへ

フルシチョフの修正主義は深い歴史的根源と社会的根源をもっており、時代の特徴をそなえている。まさにレーニンがいったように、「日和見主義は偶然の現象でも、個々の人物の罪過、疏忽、裏切りの産物でもなく、歴史的一時代の社会的産物である」(『第二インターナショナルの崩壊』『レーニン全集』第二巻)と。

第二次世界大戦いらい、国際共産主義運動はひじょうに大きな発展をとげた。同時に、その内部にみずからの対立物、すなわち、社会主義に反対し、マルクス・レーニン主義に反対し、プロレタリア革命に反対する修正主義の逆流を生みだした。この逆流の中心的な代表者は、はじめはブラウダー、そのちにチトー、現在はフルシチョフである。フルシチョフ修正主義はほかでも

なく、まさにブラウダー修正主義とチトー修正主義の継続であり、発展である。

ブラウダーの修正主義は、一九三五年前後に早くも暴露しはじめた。かれはブルジョア民主主義を崇拜し、ブルジョア政府への必要な批判を放棄し、ブルジョアジー独裁を共産主義の天国とみなし、かれのスローガンは、「共産主義は二十世紀のアメリカ主義だ」^⑧というのである。

第二次世界大戦中における国際および国内の反ファシズム統一戦線の結成によつて、かれはブルジョアジーのいわゆる「民主」「進歩」「理知」に一層とりつかれ、その結果、まったくブルジョアジーの足もとにひれふし、骨のズイまで降伏主義者になりさがつてしまった。

ブラウダーはブルジョアジーを美化し、革命に反対し、革命を解消する一連の修正主義的言辭をまきちらした。

かれは、『ソ、米、英三国のテヘラン宣言』によつて、世界は資本主義と社会主義の「長期的な信頼と協力」の時代にはいり、「のちの世までかわることのない恒久平和」^⑨が保証されるようになったときかんに宣伝した。

かれは、ソ、米、英が達成したいくつかの国際協定は、「例外なく、世界各国と各国人民の最高の利益を代表している」^⑩「国内で混乱状態が発生するという見とおしは、国際間の秩序の見とおしとあいれない」。したがつて、「国内で階級衝突がばつ発する」ことに反対し、国内の

階級闘争を「できるだけ減少させ」「明確に制約」しなければならない、⁸⁶と宣伝した。

かれは、新しい戦争は「世界の大部分の地域を破壊させ」「五十年ないし百年のあいだ野蛮時代においこむ」であろうという言論をまきちらし、戦争のわざわいをとりのぞくには、「あらゆる階級分野をこえた一致を強調」しなければならない、⁸⁷と宣伝した。

かれは、「まったく民主的な説得と信念によつて」「社会主義を実現する⁸⁸と宣伝し、第二次世界大戦後、いちぶの国には「社会主義へ平和裏に移行できる条件がすでにそなわっている」⁸⁹といいふらした。

かれはプロレタリア政党の独自性を否定し、共産主義者の「いだいている実際の政治目的は、長期にわたつて、共産主義者よりはるかに数の多い非共産主義者の目的と、主要なすべての点で一致するであろう」⁹⁰などのべた。

このような思想にみちびかれて、かれはアメリカ共産党を解散したのである。

ブラウダーの修正主義は、アメリカのプロレタリアートの革命事業をいち度危険なふちにおいやり、しかも、その他いくつかの国のプロレタリア政党を解党主義の毒素に感染させた。

ブラウダーの修正主義路線は、フォスター同志をはじめとする多数のアメリカ共産党員から反対され、そのうえ、ひじょうに多くの兄弟党からも反対され、批判された。だが、国際共産主義

運動全体についていえば、ブラウダー主義を代表とする修正主義思潮にたいして、徹底的な批判と徹底的な清算がおこなわれなかつた。そこで、戦後の新しい情勢のもとで、いちぶの国の共産党の隊列のなかに修正主義思潮がまたもや新たに発展した。

資本主義諸国では、修正主義思潮の発展は、まずいちぶの共産党の指導者がマルクス・レーニン主義の革命路線を放棄し、いわゆる「平和的移行」の路線をとると公表したことにあらわれている。この路線をきわだつてあらわしているのが、トリアッチの「構造改革」論、すなわち、ブルジョア民主主義の合法的な道をつうじ、国家にたいするプロレタリアートの指導を実現し、独占資本に奉仕する「国有化」、⁹¹「計画化」などをつうじて、国民経済の社会主義的改造を実現しようとするものである。これはつまり、ブルジョア国家機構をうちくたかなくても、新しい社会主義的生産関係をうちたて、社会主義への移行を実現することができるということである。これは事実上、共産主義を社会民主主義にまで、墮落させるものである。

社会主義国では、修正主義思潮はまずユーゴスラビアにあらわれた。チトー修正主義の一つの重要な特徴は、アメリカ帝国主義にたいする降伏主義である。チトー一味はすっかりアメリカ帝国主義に身を売り、資本主義をユーゴスラビアで復活させたばかりでなく、社会主義陣営と国際共産主義運動を破壊する帝国主義の道具になりさがり、世界革命を破壊しようとするアメリカ帝

國主義の別動隊の役割を演じている。

アメリカ帝國主義に奉仕し、プロレタリア革命を解消し、それに反対するため、チトー一味は単刀直入に、暴力革命は「社会の矛盾を解決する手段としては」「ますます余計なものとなった」④①。ブルジョア議会をつうじて「社会主義への転換を実現」することは、「可能なばかりでなく、すでに現実となった」④②とのべている。かれらはひいては、資本主義をまったく社会主義と同一視さえしている。そして、現在の世界は「全体としては、すでに社会主義へ深く『成長して』おり、すでに社会主義的なものになっている」④③などといひふらしている。かれらはまた、「社会主義か、それとも資本主義かという問題は、こんにちではすでに全世界にわたって解決されている」④④といっている。

ブラウダー修正主義、「構造改革」論、チトー修正主義、これらは第二次世界大戦らしい修正主義思潮の主要なあらわれである。

ソ連共産党第二十回大会からソ連共産党第二十二回大会までのあいだに、フルシチョフのいわゆる「平和的移行」、「平和共存」、「平和競争」の修正主義路線は、一つの完備した体系をなすようになった。かれは、このひとそろいの商品を自分の「新製品」として、いたるところで売り歩いている。だが、これらのしるものはすこしも目新しいものではなく、ブラウダー修正主

義、「構造改革」論、チトー修正主義をよせあつめて、多少の模様替えと飾りつけをほどことにすぎない。フルシチョフの修正主義は、国際的にはアメリカ帝國主義にたいして降伏主義を実行し、帝國主義、資本主義國のなかでは、その反動的支配階級にたいして降伏主義を実行し、社会主義國のなかでは、資本主義勢力の発展をはげましている。

もし、第一次世界大戦前後における第二インターナショナルの修正主義者であるベルンシュタイン、カウツキーらが、かつて血肉をわけた兄弟であったとするならば、第二次世界大戦らしいブラウダー、チトー、フルシチョフもまた血肉をわけた兄弟であるといえよう。

ブラウダーは早くからこの点を口にしている。かれは一九六〇年に、「いま、フルシチョフは、わたしが一九四五年、そのために共産党からおいだされた『異端的なもの』をとりいれている」と書いている。かれはまたこういっている。フルシチョフの新政策は、「十五年前にわたしが提唱した路線と、ほとんど一字一句もちがっていない。したがって、すくなくとも現在では、わたしの罪悪は、すでに新たな正統になった」④⑤と。

フルシチョフ自身も、かれとチトー一味とは「同じ思想に属し、同じ理論を指針としている」④⑥と認めている。

フルシチョフの修正主義はベルンシュタイン、カウツキー、ブラウダー、チトーの修正主義に

くらべてより大きな危険性をもたないわけにはいかない。それはなぜか。ソ連が最初の社会主義国であり、社会主義陣営のなかの大国であり、レーニン主義のふるさとだからである。ソ連共産党はレーニンのつくりあげた大きな党であり、国際共産主義運動のなかで歴史的に形成された権威をもっている。フルシチョフはまさにこのような党、このような国の指導者たる地位を利用して、修正主義の路線をあくまでおしすすめているのである。

かれはみずからの修正主義路線を「レーニン主義」の路線といいくるめ、偉大なレーニン、偉大なポリシェビキ党の権威をかりて人をまどわし、人をあざむいている。

かれはソ連共産党の歴史的な権威を利用し、大党、大国の地位を利用し、指揮棒をふりまわし、政治的、経済的、外交的などさまざまな手段をとって、修正主義路線を他人におしつけている。

かれは、労働貴族を買収する帝国主義の政策と呼応して、国際共産主義の隊列のなかで、ブルジョア化された、マルクス・レーニン主義を裏切ったいちぶの共産主義者を買収し、革命に反対するソ連指導部の路線に加勢させ、犬馬の労をとらせている。

それだからこそ、過去および現代のあらゆる修正主義者は、フルシチョフのまえにでると、まったく影がうすくなってしまうのである。

現代修正主義をうんだ社会的根源は、まさに一九五七年の宣言がのべているように、対外的には帝国主義の圧力に屈服し、対内的には、自国ブルジョアジーの影響をうけ入れたことにある。

現代修正主義者は旧修正主義者と同じく、いずれもレーニンのいったように、「客観的にはブルジョアジーの政治的分遣隊であり、ブルジョアジーの影響の伝達者であり、労働運動のなかでのブルジョアジーの手先である」(『第二インターナショナルの崩壊』『レーニン全集』第二巻)

現代修正主義をうみだした経済的基盤も、旧修正主義と同様であり、レーニンがいったように、「労働運動のなかの『上層分子』というこのあわれなほど小さな階層である」(『日和見主義と第二インターナショナルの崩壊』『レーニン全集』第二巻)

現代修正主義は、アメリカをかしらとする帝国主義と国際独占ブルジョアジーの政策の産物である。現代修正主義者は核恐喝政策によって肝をつぶされ、買収政策に目がくらんで、アメリカ帝国主義とその手先の革命に反対する下働きにまでなりさがった。

修正主義者フルシチョフもまた、アメリカ帝国主義の戦争ヒステリーのわめき声におどかされて、たましいを失い、地球というこの「ノアの箱舟」が時々刻々破滅の危険にさらされると考え、人類の前途にまったく自信をうしなってしまった。かれはなによりもまず民族利己主義から、被抑圧階級と被抑圧民族の革命が、自分に迷惑をかけはしないかと、心配している。そのた

め、あらゆる手をつくして、すべての革命に反対し、はてはコンゴでやったように、アメリカ帝
 国主義と共同行動をとって、人民の革命を撲滅することさえあえておこなったのである。かれは
 こう考えている。このようにすれば、一方ではどんな危険もおかさないですみ、他方ではアメ
 リカ帝国主義といっしょになつて全世界で勢力範囲の分割という仕事をする事ができる。これ
 そ一石二鳥というものではないか、と。その実、これは、フルシチョフが史上最大の降伏主義者
 であることを明らかにしているにすぎない。人をそこなうフルシチョフのこうした政策を実行す
 れば、かならず偉大なソ連にはかり知れない損害をあたえる結果になる。

すでに数十年の歴史をもっているソ連のような社会主義国に、なぜフルシチョフ修正主義が出
 現したのであるうか。これはなんの不思議もない。どの社会主義国でも、社会主義と資本主義の
 どちらが勝利するかという問題は、ひじょうに長い歴史の時期を経て、はじめて一步一步解決さ
 れるものだからである。社会に資本主義勢力がまだ存在し、階級がまだ存在するかぎり、修正主
 義の生まれる温床があるのである。

フルシチョフは、ソ連ではすでに階級は消滅した、資本主義復活の危険性はなくなった、す
 でに共産主義は建設されつつあるなどといっている。これは、ことごとく人をあざむくものであ
 る。

事実、フルシチョフの修正主義的支配、公然とソビエト国家のプロレタリアート独裁の性格を
 あらためると宣言したこと、一連のあやまった国内政策と対外政策を実行したこと、これらによ
 り、ソ連社会の資本主義勢力は、いま、政治、経済、文化・思想その他の分野で、ものすごい勢
 いではらんしている。フルシチョフ修正主義が生まれた社会的根源は、まさにソ連において日
 ましにはらんしているこうした資本主義勢力なのである。

フルシチョフの修正主義はこのような資本主義勢力の利益を代表し、かつ、それに奉仕してい
 るにほかならない。したがって、フルシチョフの修正主義は、けっしてソ連人民に共産主義など
 というものをもたらすはずがなく、かえって社会主義の成果に重大な脅威をあたえており、そし
 ていま、資本主義の復活に大きな門をひらいている。これこそアメリカ帝国主義の追求している
 「平和的進化」の道にほかならない。

プロレタリアート独裁の全歴史はわれわれに、資本主義から社会主義への平和的移行は不可能
 であるとおしえている。ところが、社会主義から資本主義への「平和的進化」は、すでにユーゴ
 スラビアの先例がある。現在、フルシチョフの修正主義もまた、ソ連をこの道につれこんでい
 るのである。

これはプロレタリアート独裁の歴史上でも、もつとも深刻な経験であり、教訓である。すべて

のマルクス・レーニン主義者、すべての革命的人民、ひいてはわれわれののちの子孫まで、どんなことがあつてもこの大きな教訓を忘れてはならない。

われわれの希望

ソ連共産党第二十回大会から現在まで、わずか八年しかたっていない。このきわめて短い歴史上の一瞬間に、フルシチョフ修正主義がソ連や国際プロレタリアートの革命事業にあたえた損害は、あまりにも大きく、あまりにもゆゆしいものである。

いまこそ、フルシチョフ修正主義を批判し、清算すべきときである。

ここで、われわれはソ連共産党の指導的同志に勧告したいと思う。過去、どれだけ多くの日和見主義者と修正主義者が、ひとりのこらざる歴史のゴミのためになげすてられたことであろう、きみたちはどうしてあくまでかれらのあとをおつていかなければならないのか。

ここで、われわれはまた、修正主義の誤りをおかしたその他の兄弟党の指導的同志に真剣に考慮するよう希望する。ソ連共産党指導部の修正主義路線のあとについて、いったいどんな結果をえたか。われわれは知っている——修正主義のどろ沼に深くはまりこんだ人びとをのぞいて、すくなからぬ同志は、まどわされたか、あざむかれたか、あるいは強制的に誤りの道を歩まされ

ていることを。われわれは信じている——プロレタリア革命家であるかぎり、最後には革命の路線をえらび、革命に反対する路線を拒否し、マルクス・レーニン主義をえらび、修正主義を拒否するのであろうことを。この点にたいしてわれわれは、ひじょうに大きな期待をもっているのである。

修正主義は革命の歴史の車輪の前進を絶対におしとどめることはできない。みずから革命をおこなわない修正主義の首領たちは、真のマルクス主義者、革命的人民がたちあがって、革命を遂行することを絶対におしとどめることはできない。レーニンは、『プロレタリア革命と背教者カウツキー』のなかで、こう書いている。カウツキーがすでに裏切りものになりさがったとき、ドイツのマルクス主義者ギーブクネヒトは、労働者階級にたいして、こうよびかけるよりほかなかつた——「これらの首領をおしのけ、人びとを愚鈍にし卑俗にする、かれらのあのような説教がらのがれ、かれらにかまわず、かれらを相手にせず、かれらをのりこえて、革命をめざし、革命をおこなえ！」（『レーニン全集』第二八巻）と。

第二インターナショナルの修正主義が、ヨーロッパの多くの党の内部で支配的地位をしめていたとき、レーニンはフランスの共産主義者ポール・ゴレの意見をひじょうに重視した。

ゴレはいっている。「われわれの敵は、社会主義がもうおしまいだとわめきたてている。かれ

らはせつからすぎる。だが、かれらがまったく間違っているとだれがいえよう。現在死にかけているのは、社会主義一般ではなくて、社会主義の一つの変種である。それは甘ったるい、理想を欠き、情熱を欠いた、官僚的な体裁と家父長的な威風をそなえた社会主義である。それは勇敢な精神に欠け、大胆な行動力に欠け、統計をこのみ、ひたすら資本主義ときわめて友好的な協定をとりむすぼうとする社会主義である。それは、ただ改良だけをし、わずかな利益のために自分の長子権すらゆずりわたした社会主義である。このような社会主義はブルジョアジーにとつては、人民のいきどおりに水をかけるものであり、プロレタリアートの勇敢な行動の自動ブレーキである」(『フランスの社会主義者の正直な声』「レーニン全集」第二巻)と。

これは実に妙をえた描写である。レーニンはこれがフランス共産主義者の正直な声であるといつた。現在、人びとは、現代修正主義もまさに「死にかけている社会主義の一つの変種」にはならないことを見いだすであろう。人びとはまた、かの修正主義が支配的地位をしめている党内部で、無数の正直な共産主義者の声が、なんと高らかにひびきわたっていることかを、見いだすであろう。

「沈む舟のかたわらを、なん千もの船がとおろすぎ、枯木のまえでなん万もの木が春をほこる」。ニセものの社会主義は死にかけている。だが、科学的社会主義は青春の活力にみちみちており、いま、いつそう力強い足どりで前進している。生命力をもった革命的な社会主義は、かならずすべての困難と障害をのりこえて、全世界をかちとるまで、一步一步勝利にむかつて前進するであろう。

ここでわれわれは『共産党宣言』の結語をもって、この論文をむすぶことにしよう。

「共産主義者は自分の見解や意図をおおい隠すことをいやしむ。共産主義者は、現存するすべての社会制度を暴力的に転覆させずには、かれらの目的が達成できないことを、公然と声明する。支配階級をして共産主義革命のまえに戦慄させよ！ プロレタリアートは、この革命によつて、鉄鎖のほかに失なうものをもたない。かれらの獲得するものは全世界である。

万国のプロレタリア 団結せよ！」

① 一九五六年二月十四日ソ連共産党第二十回大会におけるワルシチョフの報告

② ①に同じ

③ 一九六一年一月六日ソ連共産党中央委員会高級党学校、社会科学アカデミーおよびマルクス・レーニン主義研究所党組織の総会におけるフルシチョフの報告

④ ①に同じ

- ⑤ ①に同じ
- ⑥ 「ソ連共産党綱領」(一九六一年十月三十一日ソ連共産党第二十二回大会で採択)
- ⑦ ⑥に同じ
- ⑧ ベルンシュタイン『社会主義の前提と社会民主党の任務』
- ⑨ ⑧に同じ
- ⑩ ベルンシュタイン『社会主義とはなにか』
- ⑪ ベルンシュタイン『政治的大衆ストとドイツ社会民主党の政治状況』
- ⑫ カウツキー『唯物史観』
- ⑬ カウツキー『社会民主主義は共産主義に対抗する』
- ⑭ カウツキー『プロレタリア革命とその綱領』
- ⑮ カウツキー『新しい戦術』
- ⑯ メーリングへのカウツキーの手紙(一九九三年七月十五日)
- ⑰ O・Vクレーシニン監修『マルクス・レーニン主義の基礎』
- ⑱ ソ連『コムニスト』誌の論文『レーニンの社会主義革命の理論と当面の現実』(一九六〇年第十三号)
- ⑲ ソ連『コムニスト』誌の論文『レーニンと現代』(一九六〇年第五号)

- ⑳ 一九五六年二月十六日ソ連共産党第二十回大会におけるミコヤンの発言
- ㉑ ソ連『コムニスト』誌編集部の記事『マルクス・レーニン主義は共産主義運動の団結の基礎である』(一九六三年第十五号)
- ㉒ 『ソビエツカヤ・ロシア』紙の論文『世界革命の過程はどのように発展するか』(一九六三年八月一日)
- ㉓ 一九六二年十二月四日チェコスロバキア共産党第十二回大会でのブレジネフのあいさつ
- ㉔ ソ連『コムニスト』誌の論文『戦争と革命』(一九六一年第四号)
- ㉕ ⑱に同じ
- ㉖ ⑱に同じ
- ㉗ ㉔に同じ
- ㉘ 一九五六年六月二十一日キウニス国際第四十一回年次大会でのダレスの演説
- ㉙ 一九五七年四月二十二日ニューヨークA.P.通信社昼食会でのダレスの演説
- ㉚ 一九六三年七月十四日ソ連共産党中央委員会がソ連共産党各級党組織と全共産党員にあてた公開書簡
- ㉛ ㉚に同じ
- ㉜ ㉚に同じ
- ㉝ フォスター『アメリカ共産党史』

- 84 ブラウダー『テヘラン——戦争と平和におけるわれわれの道』
- 85 84に同じ
- 86 ブラウダー『テヘランとアメリカ』
- 87 ブラウダー『共産主義者と全国の間結』
- 88 ブラウダー『勝利の道』
- 89 ブラウダー『世界共産主義とアメリカの外交政策』
- 40 84に同じ
- 41 E・コザノビッチ『史的唯物論』
- 42 カルデリ『ユーゴスラビアにおける社会主義的民主主義の實踐』
- 43 M・トドロビッチ『ユーゴスラビア共産主義者同盟とソ連共産党との関係についての宣言』
- 44 M・ペロビッチ『経済学』
- 45 ブラウダー『スターリンはどのようにしてアメリカ共産党を壊滅に追いやったか』
- 46 一九六三年八月二十八日、ユーゴスラビアのプリオーニ島での記者会見におけるフルシチョフの談話

付 録

平和的移行の問題にかんする意見の要綱

(一九五七年十一月十日、中国共産党代表団が
ソ連共産党中央委員会に提出した書面要綱)

(一) 資本主義から社会主義への移行の問題について、たんにひとつの可能性だけではなく、平和的と非平和的という二つの可能性を提起した方が、いっそう融通性があり、これによってわれわれは政治上いつも主動的な地位に立つことになる。

1、平和的移行の可能性を提起することは、われわれが暴力を使用する問題でそれがなによりもまず防衛的なものであることをあきらかにし、これによって資本主義国の共産党はこの問題で受ける攻撃を回避することができ、政治的に有利である。つまり、大衆を獲得するのに有利であり、ブルジョアジーの口実をうばい、ブルジョアジーを孤立させるのに有利である。

2、将来、国際情勢あるいは国内情勢が激しく変化するという条件のもとで、もしも、ある特定の国に平和的移行の実際の可能性があらわれたならば、われわれはいちはやく時機を利用し

て、大衆の支持をかちとり、平和的方法で権力の問題を解決することができる。

3、しかし、われわれは、こうした願望のために自分じしんをしばらくつけてしまつてはならない。ブルジョアジーは、みずからすすんで歴史の舞台からひきさがるものではない。これは、階級闘争の普遍的法則である。いかなる国のプロレタリアートと共産党も、革命の準備をすこしもゆるめてはならない。いつでも反革命の襲撃を迎えうつ用意をしておかなければならず、労働者階級が権力を奪取するという革命の瀬戸際にさいし、もしブルジョアジーが武力で人民の革命を弾圧してくるなら（一般的にいってこれは必然的なことである）、武力でそれを打倒する用意をしておかなければならない。

(二) 当面の国際共産主義運動の状況にてらして、戦術的観点から、平和的移行の願望を提起することは有益ではあるが、平和的移行の可能性を強調しすぎることは妥当でない。その理由はつぎのとおりである。

1、可能性と現実、願望と願望実現の成否は、別の事柄である。われわれは平和的移行の願望を提起すべきであるが、自己の希望をおもにこれにかけてはならず、したがって、この面を強調しすぎてはならない。

2、もし平和的移行の可能性を強調しすぎるならば、とりわけ、議会での多数をたたかいたる

ことによつて権力をとる可能性を強調しすぎるならば、容易にプロレタリアート、勤労人民、共産党の革命的意志をよわめ、思想的にみずからを武装解除することになる。

3、われわれの知るところでは、現在こうした可能性はまだどの国でも現実的な意義をもつに至っていない。たとえ、ある特定の国においてこうした可能性がいくぶん多くあらわれているとしても、圧倒的多数の国にとっては実際に合致しないので、この可能性を強調しすぎることは、やはり妥当でない。万一ある国にこうした可能性が現われたとしても、共産党は一方では、こうした可能性をかちとり、他方では、いつでもブルジョアジーの武力攻撃をむかえうつ用意をしておかなくてはならない。

4、こうした可能性を強調することは、けつしてブルジョアジーの反動性を弱める役割を果たしてはならない、ブルジョアジーをマヒさせる役割も果たしてはならない。

5、社会党についてみても、そのためにかれらをいくぶんでもいっそう革命的にすることはできない。

6、各国の共産党をそのためにいくぶんでもいっそうのばすことはできない。逆に、もしも、いちぶの共産党がそのためにみずからの革命的な姿をばやし、大衆の目につる共産党が社会党と混同されてしまうようになれば、それはただ、共産党を弱めるだけである。

7、力をたくわえ、革命を準備することは、もつとも骨の折れることであるのにたいし、議会闘争は、なんといつてもやはりなりに安易なものである。われわれは議会闘争の形態を十分運用すべきであるが、だが、その役割には限度があり、もつとも重要なのは、革命の力をたくわえるという骨の折れる仕事をすすめるべきだということである。

(三) 議会で多数を占めても、けつしてふるい国家機構(主として武力)の粉碎、新しい国家機構(主として武力)の樹立ということにはならない。もしもブルジョアジーの軍閥・官僚の国家機構が粉碎されなければ、プロレタリアートとその信頼できる同盟者が議会で多数をしめることは、不可能であるか(ブルジョアジーは自己の独裁をかためるのに有利なようにいつでも必要に応じて憲法を改定する)、あるいは不確実なものである(たとえば、選挙の無効を宣言したり、共産党の非合法化を宣言したり、議会を解散したりするなど)。

(四) 社会主義への平和的移行の意味を、ただ議会の多数によるということだけに解釈すべきではない。主要な問題は国家機構に関する問題である。マルクスは十九世紀の七十年代に、社会主義がイギリスで平和裏に勝利する可能性を認めたことがある。なぜなら、イギリスは、「当時、軍閥制度と官僚制度の最も少ない国であった」からである。レーニンは二月革命後のある時期に、「全権力をソビエトへ」ということによつて、平和的發展をつうじて革命を勝利させよう

と望んだことがある。なぜなら、当時、「武器が人民の手ににぎられていた」からである。マルクスの定式もレーニンの定式も、ふるい国家機構を利用して平和的移行を実現させるということを意味していない。「労働者階級は、できあいの国家機構をたんにその手ににぎり、それを自身のためのにつかうことはできない」というマルクスとエンゲルスの名言をレーニンはくりかえし解釈した。

(五) 社会党は社会主義の政党ではない。ごくいちぶの左派をのぞいて、それはブルジョアジーに奉仕し、資本主義に奉仕する政党であり、ブルジョア政党の一変種である。社会主義革命の問題で、われわれと社会党の立場は根本的にちがっている。この限界をあいまいにしてはならない。この限界をあいまいにすることは、社会党の指導者が大衆を欺瞞するのに有利であり、われわれが社会党の影響下の大衆を獲得するのに不利である。しかし、社会党にたいする働きかけをつよめ、社会党の左派および中間派との統一戦線の結成に努力することがひじょうに重要であることは疑う余地もない。

(六) 以上は、われわれのこの問題にたいする理解である。われわれはちがった意見をもちているが、いろいろ考慮した上、二十回大会以後、われわれはこの問題について意見を発表しなかつた。いま、共同宣言を発表することになつたので、われわれの観点を説明せざるをえない。

だが、このことはけつして宣言草案のなかで共通のことばをかちとることのさまたげとなるものではない。宣言草案がこの問題でソ連共産党第二十回大会の定式とつじつまを合わせることを表明するため、われわれは、ソ連共産党中央委員会が本日提出した原稿をもとに、個別的な個所に改正をくわえることに同意する。

プロレタリア革命とフルシチョフ修正主義
ソ連共産党中央委員会の公開書簡を評す（八）

1964年 初版発行

出版者 外 文 出 版 社

（北京阜成門外百万荘）

発行者 中 国 国 際 書 店

（北京P.O.Box 399）

番号：（日）3050—922

3—J—576P

00031

★ ソ連共産党指導部とわれわれとの
意見の相違の由来と発展

ソ連共産党中央委員会の公開書簡を評す

★ スターリン問題について

ソ連共産党中央委員会の公開書簡を評す(二)

★ ユーゴスラビアは社会主義国か

ソ連共産党中央委員会の公開書簡を評す(三)

★ 新植民地主義の弁護士

ソ連共産党中央委員会の公開書簡を評す(四)

★ 戦争と平和の問題での二つの路線

ソ連共産党中央委員会の公開書簡を評す(五)

★ 根本的に対立している二つの平和共存政策

ソ連共産党中央委員会の公開書簡を評す(六)

★ ソ連共産党指導部は

現代最大の分裂主義者である

ソ連共産党中央委員会の公開書簡を評す(七)

★ ソ連共産党指導部がインドと連合して中国
に反対している真相

★ 全世界の人民は団結して核兵器を全面的
に、徹底的に、あますところなく、だ
んこととして、禁止し、廃棄しよう

★ 哲学、社会科学工作者の戦闘的任務

